
アンドラハルの魔王

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンドラハルの魔王

【Nコード】

N6103Z

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明がまだ未発達な異世界。天空城にて最終決戦を控え、勇者の仲間達は千里眼ですべてを見てきた妖精を中心に過去を振り返る。

プロローグ 天空城にて

五一三年、天空城がまだアーディナルの空を飛んでいた時代。王の間を目前にして、廊下に座り込みをする者達がいた。

お互いに顔を見ようとせず、ただ黙って時が来るのを待っていた。

剣豪サージッドノヴァンはいらついた様子で、さきほどから剣の鍔をもてあそんでいる。

王の間で戦いが始まれば、すぐにでも飛び込むつもりだった。

「とうとう、この時が来ちゃったな……」

「ああ……」

彼の声に応えたのはアツカ、西部のバーリヤ平原からやってきた狼族の戦士だ。

人前では帽子を目深に被って獣の耳を隠しているが、ときおり口の端をつり上げて異様に発達した犬歯を見せる癖がある。魔法は使えない。

「この戦いで全てが終わる。魔界が滅びるか、人界が滅びるか」

「しかし、本当にこれで全てが終わるのか？」

口を挟んだのは賢者オルフェウスだった。

卓越した魔法の使い手だが、この中で最も若年と言って過言ではない。体に合わない大きな魔法の杖を抱え、常に最大の力が出せるよう、魔力を温存している。

「僕にはとてもそうは思えないんだが……」

「オルフェウス、迷ってはいけないわ」

女剣士イーラは落ち着いて彼を諫めた。

普通の男性よりも体躯の大きな彼女は、サージよりも大きな超巨剣の使い手だ。剣と呼ぶのも憚れる建物の柱のような武器を、今は椅子代わりにしている。

「目の前にこの城の主が居る、この城はイーサファルトを目指して、今もなお人界の上空を飛びつづけている。このまま行けば間違いなく戦争になる、私たちはそれを阻止しなければならない。いま私たちが考えていいのは、ただそれだけよ」

「分かっちゃ居るけどさ……」

「あ……あ……あの……みな……みな……さん……」

おどおどしながら、ようやく声を挟むことができたのは尼僧のサーラだ。

ゆったりした西部の民族衣装を着ていて、髪飾りを頭が重くなりそうなほどたくさんつけている。彼女は治癒の力を司る水の精霊ゼテンを信仰しており、多少ではあるが治癒魔法が使えた。

「わた……しは……その……あの……ひと……が……まさか……あの……ひと……だって……たくさん……助けて……くれたし……わたし……魔法……へた……だけど……あのひと……上手……」

「なんで……なんで……あのひと……今は……敵……よく……よく……わからなくて……」

サーラはうまく言葉に出来なかったらしく、結局黙ってしまった。沈黙を破るように、アツ力は言った。

「ゲールハーツが言ったことには……」

「やめるんだ、アツカ！」

サージは立ち上がって彼を怒鳴りつけた。サーラは泣きそうにな
って耳をふさいだ。

「もう死んだ奴の事をいちいち気にするな！ あいつは死んだ、こ
れからこのパーティがどの道をたどるかは、残された俺たちが決め
ることだ！ ミュン！ ……おい、ミュン！」

ただひとり、知らない顔をして窓の外を眺めていた女性が居た。
森の管理者サテモのミュン＝アシケンだ。彼女のとがった耳は
遙か遠くの出来事を聞き、目の前の出来事のように知ることが出来
る、《良き耳》と呼ばれる耳だ。

「お前なら、何か知ってるはずだろう……お願いだ、教えてくれ、
あいつは、本当に魔王だったのか……！ どうして俺たちを助けた
んだ……！ ただ味方のふりをして俺たちに取り入って、体よく利
用していただけだったのか……！」

ミュンは、長い耳をぴくぴくと動かして、困ったように首をかし
げた。

「その質問に答えるのは難しいわ」

「そんな筈はないだろう……！ お前は全てを見て知っているはず
だ！」

「サージ、私にはこの戦いそのものが複雑すぎてわからないの。一
体誰が魔王で、誰が勇者だったのか。私には魔王は何人もいたよう
な気がするし、勇者だって何人もいたような気がするわ。そもそも
魔王とは何なの？ 勇者とは何なの？」

ミュンの回答に、一同は息を呑んだ。サージはむしろ怒りさえし

た。

「ふざけんな……！ 決まっている、魔族の王が魔王！ 魔族を束ねる者だ！ そして人間に害悪をなすそいつを征伐する代表が勇者だ、お前はそれを今まで知らずに戦ってたのかよ……！」

憤慨する彼に対して、どうして怒りを買ってしまったのか、という複雑な面持ちをするミュンに、オルフェウスは優しく諭した。

「ミュン……今の私たちに必要なのは、サテモの哲学的な話じゃないんだ。彼が我々の敵だったのか、味方だったのかという、すごく単純な話だ」

「敵だったかもしれないし、味方だったかもしれない。どちらにもなれたかもしれないし……最初からそうなるように決まっていたのかもしれない。……結果として彼は魔王で、彼女は勇者になってしまったわけですが」

ミュンの不思議な回答に、とうとうオルフェウスも困惑するような顔つきになってしまった。

答えがいつこうに手に入らず、いったいどうしたものかと顔を見合わせる英雄達の間で、ミュンはふんと息を漏らした。

「単純に言い表すには、この戦いは複雑すぎるようです……なら、順を追って話しましょう、私たちと巡り会うより少し前の、《魔王ミュシャ》と《勇者エーサ》について」

勇者エーサ

——二年前、イーサファルト王国、ホルへ高原、公爵の城。

ゲールハーツは頬をしきりにかいていた。目の前に少女が居る。黒髪に黒い瞳、体は男物の鎧を着こなせるほど大きい、しかし、肌は触ると溶けそうなほど白い。

この少女に、勇者にふさわしい剣の手ほどきをするのが彼の役割である。

「エーサさま、そう何度も何度もお城を抜け出されてはこまります……ヘグニ公にお役目を仰せつかった私どもを困らせないでください」

少女は、つーんとそっぽを向いた。

「礼儀作法の授業にはちゃんと出ております」

「それで礼儀作法が身についていないのではお話にならないではありませんか」しかも語尾が微妙に変だ。

「失敬な、国語の授業にも、教養の授業にも、魔法の授業にも、ちゃんと出ております」

「ちゃんと出ていないの私の授業だけですか……」

ゲールハーツはぷるぷると拳をふるわせた。いったいどういう意味だ。

教える立場の彼も年のころはさほど少女と変わらないので、ひよっとすると彼だけ舐められているのかもしれない。

ゲールハーツはまだ二十代前半の青年である。七年前に元服し、

アルト公爵に仕える一介の正騎士という身分になった。

いままで何人か新人の剣術指南を受け持ったことはあるが、彼女には優秀な新人になくってはならない「やる気」がない。

まるで精神修養のために嫌々騎士にさせられた貴族のぼっちゃんさながら、やらされている感が見え透いていた。アーディナル中部では伝統的に若い頃に騎士見習いをする家系が多く、ゲールハーツもそうだった新人を受け持ったことがある。

「エーサさま、あなたはご自分がいつたい何者であるかという自覚が足りません。あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！ ドラゴン・ライダーの赤い星に導かれ、異世界より現れた勇者だ！ アンドラハルの魔王を討伐し、この世に更なる光をもたらす救国の英雄である！」

「英雄である！（キリッ、じゃありません。それでは用意された台詞をただなぞっているだけではありませんか！ そうではありません、ご自分の言葉でおっしゃってください、あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！ ……」

反射的に言ってしまったエーサは、はつとしてしばらく固まっていた。どうやら続く言葉がでなかったらしく、ふいに涙目になった。

「……うつつ、だって、これを覚えなければご飯が食べられなかったんであります……」

はっ、そうか、授業をサボったら、ご飯ぬきにすればいいのかとゲールハーツは一瞬感心してしまったが、相手は救国の勇者だ、一介の家庭教師にご飯抜きなどという強権が発動できるはずもない。ここはあえなく断念した。

しかし……驚くべき記憶力だ。

ドラゴン・ライダーの赤い星が最後に出現し、北の遺跡で彼女が

発見されたのがつい三ヶ月前。ヘグニ公爵によれば、そのとき勇者はこの世界の言葉をまるで話せなかったという。

伝説の勇者を見つけたことを、王にはすでに報告してしまった……
… なんとか王に会わせられるぐらいには教養をたたき込まねば、ということと彼らが家庭教師として公爵領に招かれ、朝から晩までみっちり徹底的に教育を施しているのである。

この短期間で言語は不自由なくらい習得してしまったし、これだけの長台詞をすらすらと暗記してしまったのはさすがだ。魔法使いに向いているかもしれない、きっと呪文を覚えるのも容易だろう。

「ゲールハーツ、もし王からそういう質問があつたら、私はどうすればいいのでありましょうか？」

「素直におっしゃったらどうです？ 元いた世界の事でも」

「私は元居た世界の記憶を忘れてしまったのであります……なに覚えていない、気がついたら遺跡に倒れていた……」

エーサの声は、すこし震えていた。

「私はどうすればいいのでありましょうか？ 本当は自分が何者で、どこから来たのか、本当に勇者であるかどうか分からないのであります……」

ゲールハーツは、エーサの肩をがっしと掴んだ。

薄い灰色の瞳を持つ彼が生涯見たこともない、漆黒の瞳をまっすぐ見ると、まるで瞳の中に吸い込まれそうだった。

「エーサさま、あなたは勇者です。そして我々の希望です。……我々にはあなたをお守りする義務がある、そしてあなたにはその献身に報いる義務がある、それが信頼というものです」
「わたくしには良くわからないであります……」

「分からなくても結構です。授業をお休みになるときは、遠慮なさらずに私におっしゃってください。急にいなくなつて、下々の者達をむやみに不安にさせるようなことだけは、おやめになってください、それは勇者のすることではございません。あなたは我々の希望なのですから。いいですね？」

唇をとがせたり、きゅつと結んだり、エーサの心の中は色々と忙しそうだった。

ようやく、おそろおそろと言つた風に声を出した。

「ゲールハーツ……今日は休んじゃダメ？」

「今日はもうお疲れですか？」

「ううん、これから薬草摘みに行くのであります」

「いいでしょう。あまり遠くへ行かないように。それと基礎練（素振り三千回、ダッシュ五千回、腹筋背筋二千回）だけでもやっていただくさいね」

「やってられるかー！」

エーサはつかつとなつて鋭いまわし蹴りを放つた。彼女は鎧を身にまとい、脛にまともに当たつた威力は強烈だった。ゲールハーツが悶えている間に、勇者はその場から逃げ出した。

「きよ、今日は用事があるから休むのでありますー！ これにてー！」

「ま、待ってください！ 《伝説の勇者様》には軽いメニューですよ……？ 一体、どうしてそんなに嫌がるんですか……！」

ゲールハーツの中の勇者基準は、とてつもなく高かった。

それがエーサにとって重荷だったのは言うまでもないが、それだけエーサは期待されていたということだ。

それが《勇者エーサ》だった。

魔王ミュシャ

ミュシャは一枚のカードを天井に掲げ、そこに書かれた魔法文字をにらみつけた。

ウェン（X）、Wの発音を表す。闇の精霊ルージャ（LWG）の第二文字で、あまり縁起のいい単語を連想しない。

雪、消滅、減衰、減少。

そのなかで彼の未来を表す最も適当な言葉は、『消滅』だろう。彼は残ったカードを放り投げて、ソファに仰向けになった。

「……参った」

このままではいずれ、彼も本当に消滅しかねない。

「ミュシャさまー、ミューシャーさまー」

ドアが無遠慮にがんこん叩かれて、ミュシャは眠りにつこうとしていた眼を不機嫌そうに開いた。

長い白髪、痩身。ワイシャツを着崩し、瞳はエメラルドの緑色にも海の青色にもみえた。

「ミュシャさまー、そこに居るのはわかっておりますー、ご自分では外に出ることの出来ない引きこもりの大魔法使いミュシャさまー、エーサが参りましたよー、お返事なさってくださいー」

ああもつ、とため息をついて立ち上がった。
いちいち煩い奴だ。

ドアを開くと、薬草を両手一杯に抱え、満面の笑みを浮かべた少女がいた。

「薬草とって参りましたよー」

ミュシャは複雑な面持ちで少女を眺めた。

顔は多少汚れていて、擦り傷もできている。

逃亡中の身である今の自分は、薬草を採りに外に出ることすら出来なかった。

こんな少女に頼らなければ生きていけない現実に、情けない思いをする。

「薬……」

「はい？」

「薬をやる、上げれ」

「はいっ」

ミュシャは薬草をひとつひとつ分別すると、水につけて汚れを落とし、大きな鍋の中で湯がいた。

彼がこの空き家に転がり込んでから三ヶ月が経つが、ここに訪れるものはこの変わり者の少女か、さもなくば行方不明になった彼女を捜索している城の兵士だった。

むろん、ミュシャは今まで城の兵士に彼女を差し出したりはしていない。そんなことをして目をつけられたら余計に困るからだ。

屋敷中にあふれている魔法の装飾品や実験道具の類いから見て、どうやら高名な魔法使いの家であることは間違いない。

だが、いまはその主が不在である。ミュシャが待てども待てども、いつこくに訪れる気配はなかった。

——死んだのか？

ミュシャは時にそうつぶやく。空っぽの屋敷に響いた声は、やたらと真実味を帯びている気がする。

けつきよく彼はこの少女に頼らざるを得なかった。

ポジション
回復薬が完成するまでの間、エーサはおとなしくテーブルの席で待っていた。

「次の材料だが……」

ミュシャは本棚にぎっしり詰まった本のなかから、一冊を選んでそれを彼女の前に広げてみせた。

分厚い魔道書は複数のページに何百もの栞がはさまれ、深海魚のヒレのようになっていた。

「これだ、『偽りの金塊』と『お化けネズミの爪』。これが必要だ」

このぐらいならすぐに手に入るだろう、と思われるものだった。

エーサはテーブルに身を乗り出して、じいつと魔道書をのぞき込んだ。

黒髪がふわりと鼻をくすぐって、ミュシャは彼女が毎日体を清潔に保っている事を知る。

「これを持ってくれば、よろしいのでありますか」

「そうだ」

「ミュシャさま、これは一体なんの材料になるのでござりまするか？」

ミュシャはほんの一瞬だけ答えにつまったが、うつたえる素振りもみせずに即答した。

「秘密だ」

「ミュシャさまのクエストはいつも謎が多いのであります……」

「お前こそ、どうしてそう頻繁に回復薬^{ポーション}をほしがる？」

「剣のお稽古が厳しいのでござりまする……」

エーサはため息混じりに言った。

「特に先生が『伝説の勇者さまならこのくらい出来て当然でしょう』なんて言つて、無理難題を押しつけてくるのであります……ミュシャさまの回復薬^{ポーション}がなければ、とつくに死んでいる身なのであります」

「ひどい話だ」

ミュシャは眉をしかめた。

彼女が伝説の勇者であるという話は、出会ったときに聞いている。「それはいつたい、どういう伝説なのか？」という問いに対し、エーサが町に出かけて話を聞いて回った結果、

「はい、どうやらこの国には偉い予言者さまが居て、その予言者さまが予言を残されたそうなのです。『次に空に赤い星が出現したときに、その星の出ている方向から三人の賢者さまが一人のお客さまを連れてくる、そのお客様が魔界を征服する伝説の勇者さまだ』と言われていたそうです」

という情報を手に入れてきた。

はからずも、ミュシャが彼女にあたえた最初のクエストとなった。

「……最近、あまり自信がないのであります」

鍋はくつくつと煮たっていた。

頃合いを見計らって、ミュシャは席を立った。どろどろになった薬草に少量の光の石の粉をまぶし、失われた魔力を補完する。そし

てそのまま瓶に摘めていった。

「なぜだ。お前はまさにその『三人の賢者が連れて帰った客人』なのだろう?」

予言にある赤い星は、出現から三ヶ月が経った今なお、同じ方角に輝き続けている。

この町から見て南方、そこには見捨てられた古代遺跡があるだけだ。さらに南に行けば広大な魔界が広がっている。

エーサはそこでふらふらしている所を発見されたという。ヘゲニ公爵の遣わした三人の賢者が彼女を連れて帰ったらしい。

「間違いないのであります。けど、戦うのが嫌なのであります。剣を見ると、恐くて震えてしまうのであります」

「臆病な勇者というわけか」

「で、でも、魔法なら大丈夫なのであります!　きっと私は剣より魔法の方が得意な勇者になるのであります!」

エーサはがたと椅子から立ち上がった。ミュシャは怖気がするほどの長身で、かなり背丈の高いエーサが彼を見上げなければならなかった。

「ミュシャさま、よろしければ、その、エーサに魔法をご教授ねがいますか?」

「ま、魔法を……?」

なぜかミュシャはすぐに返答できなかった。

「……無理だ」

「なぜであります?　お願いであります、大魔法使いのミュシ

「やさま。生まれて初めて使った基礎魔法で火の玉を生み出したら、町をひとつ消し飛ばしてしまったことのあるミュシャさま！」

「お前はそういう記憶力は抜群だな……答える必要は無い、ただ教えられないだけだ」

「エーサが、むーっと膨れていると、ミュシャは回復薬の^{ポーション}入った瓶を押しつけるように渡した。」

「薬はやる。今日の分だ、持って帰れ」

「帰りたくありません」

「どうした」

「……塗って欲しいのであります」

顎をついとあげ、せがむように彼を見上げた。

ミュシャは瓶のコルク栓を抜くと、油っこい液体を指につけ、真っ白い額に軽く塗りつけた。

一瞬ひるんだように眼を閉じるエーサに、立て続けに頬や顎に塗りつけていった。

擦り傷はしゅうつと音を立てて消えたが、まだ彼女はむすつとしている。

「クエストに成功したら、また塗って欲しいのであります」

「唯のただっ子だな、勇者は」

「《偽りの金塊》？」

相談を受けたゲールハーツは、その内容に眼を見張った。

エーサはいたってまじめだったが、かえって彼は困惑した。

「どうして、そんなものが欲しいのですか？ 普通の金塊より価値は数段劣りますし……長く持つっていると持ち物を腐食させる力があるって、食糧や装備が劣化していくと言われていきます……」

「今すぐ欲しいのであります。ゲールハーツ、なんとか手に入らないでありますか？」

「そんなもの、普通は売っていませんよ。コボルトがたまに落としますが、冒険者だって大抵はその場に捨てていきますから……そう、それでコボルトの出現する洞窟に落ちていたりして、冒険者が通っていたことが分かったりしますね」

「コボルトの洞窟……」

彼の言葉にヒントを得たらしい、エーサはなにやら口の中でぶつぶつ呟いていた。

ゲールハーツに理由は分からないが、彼女はどうかやらそのアイテムがどうしても気になるらしい。

やがて彼ははっとひらめいた。

そうだ、これだ。これは利用しない手はない。

「エーサさま、次の稽古は、お休みで構いませんよ」

ゲールハーツは思い切って言った。エーサはため息をついた。

「また？ けどけっきょく基礎練はしなくちゃならないんでしょう？」

「いいえ、基礎練はいつもの半分で構いません、時間がもったいないですからね。……次回からはいいよいよ実戦です、公に許可をもらって、コボルトの洞窟に行きましょう！」

その男がどうして人界にいたのか定かではない。

しかし、決戦の日まで様々な形で勇者と関わりあっていたのは確かであろうだ。

少なくとも、エーサが魔界を制圧する勇者になるまで成長してゆく上で欠かせない、重大な人物であつたはずだ。

それが魔王ミュシャだつた。

正騎士ゲールハーツ

テーブルに置かれた《偽りの金塊》を見て、それからエーサを見て、ミュシャは眉をしかめた。

洞窟に行ってくるだけの簡単な依頼だったはずが、前回にもまして、さらに怪我が増えていた。頭や腕に巻かれた包帯が生々しい。さらにコボルトに鎧を朽ちさせる魔法を使われたらしく、鎧も損壊が激しかった。

にもかかわらず、少女はにこにこしているのである。まるでご褒美を与えられるのを待っているかのようだ。

「えへへ、えへへ」

などともじもじしながら呟いている。
ミュシャはさりげなく距離を置いた。

「……薬はやらん」
「ええーっ！」

エーサは椅子をがたと鳴らし、半泣きになって抗議した。

「どうしてでござりまするか！ なぜでござりまするか！ あんまりでござりまする！ わたくし、その為だけに頑張って金塊を取ってきたのに……！」

「とんだマゾ勇者だな。材料を私の所に無事に届けることを優先しろ、コボルトはお前のレベルで敵う相手じゃないだろう……」

まさか、真正面から戦って金塊を奪ってくるとは思わなかった。ミュシャは頭をかいた。

「私の薬に頼ってわざわざ危険なまねをするようなら、もう薬を渡すつもりはないからな」

「だって……だって、ゲールハーツ先生が『勇者たる者、どんな使命にも全力をもって当たるものです』と……」

「そのゲールハーツ先生つてのは一体なんなんだ、勇者の伝説量産機か？」

ミュシヤは《偽りの金塊》を手にとると、小さな壺に放り込んで素早く蓋をした。

このアイテムはコボルトの魔力によって金塊に似た姿をしているが、本来は周りの物を腐食させる力に特化した特殊な水の魔石である。

こうして壺の中に封印しておかなければ、屋内では安全に保管することすらできない。

彼は屋敷から外にこそ出ないが、魔物や魔法の材料に関しては桁外れの知識を持っていた。

「ゲールハーツ先生は、アルト公爵という方にお仕えしている正騎士さまであります」

「肩書きだけで嫌な奴だ……」

「そう！ そうなのであります。なんだかすごく偉そうな人で、ヘグニ公爵さまにお仕えする兵士達はみんなあのお方に頭が上がらないみたいでござりまする。そのうえ偏屈な堅物で、頭痛がするくらい几帳面で、その日に起こったことを事細かく手記に書き留めておくのであります！ 笑った所なんか一度も見たことがありません。そのくせ私がピンチに陥るとどこからともなく現れて、いとも簡単に敵をなぎ倒して、『大丈夫でございますか、勇者さま』なんて心配するような声をかけて、そのたびに残念そうな顔をなさるのでござりまするよ、心の中では『なんでこんな出来損ないが勇者な

んだ？』みたいな……！」

むきー、と唸って、エーサは悔しそうにハンカチを噛んでいた。
ミュシャはいい加減に辟易してきたらしく、彼女の愚痴を聞きながら今日の分の回復薬作りポーションに取りかかっていた。

ゲールハーツは昔の夢を見ていた。

彼の生まれた町はとある小さな港町だった。そこには父と母と、兄がいた。

剣の師もいたし、友人もいた。その頃の彼はまだ屈託無く笑うことが出来た。

だが、そこにあった多くの物は、あるとき炎によって瞬く間に崩れ落ちてしまった。

二十年前、イーサファルト王国とアンドラハルとの間に戦争が起こったのだ。

母は屋根の上に逃れ、まだ幼かったゲールハーツをずっと抱きしめていた。

——火の精霊、太陽神エークラーケス、災害の名を持つ盲目の巨人よ。

——その絶望的な高さの耳に祈りが届いたならば、たとえ世界を踏みつぶしても、どうかこの子だけは……。

そのとき彼女は胸を槍に貫かれて、すでに死んでいたはずだった。しかし、ゲールハーツの耳には母の声が何度も繰り返して聞こえていた。

町が燃える姿を彼は見ていない。ただ町はひどく熱かったのを覚えていて。

視界に映っていたのは漆黒の空と、二十年前にも出現したドラゴン・ライダーの赤い星、そこを飛び交う翼を持った無数の魔物達だけだった。

ドラゴン・ライダーの赤い星が出現するとき、同時に地上には偉大な英雄が出現すると言われている。

だが、英雄の姿はそのときどこにも見えなかった。

いまはその星が不気味にゆがんでさえ見える。

彼は母の服を掴みながら、英雄の出現をただひたすら切望した。

そして、彼は魔物の背にまたがった男の姿を見た。

ぞつとするような長身の男だった。光を放つような白髪を風になびかせ、美しい白い肌を持っていた。さながら光が戦士の形をして前進していくようであった。

その両目は不気味な赤い光を帯びて、一瞬だけ彼の方を見た。

その顔はいまでも記憶に残っている。

男はそのまま魔物の群れと共に飛び去ってゆき、彼は二度とその姿を見なかった。

そこでゲールハーツは目を覚ました。

……眠ってしまったか。

どうやらうたた寝していたらしい。

目の前には緑豊かな草原がひろがっていた。向こうの山までうねうねと続く花畑に蝶が舞っている。

「つかまえたーっ！」

目の前の草むらから大きな声がして、ゲールハーツは慌てて体を起こした。

そこにはお化けネズミを胸に抱えたエーサが居た。白い腹をみせた巨大なネズミは、短い手足をしきりに動かして、じたばたともがいている。

「ゲールハーツ、やりました、勝ちました！ 私の勝ちにござりまする！」

エーサは、につと得意げに微笑んでみせた。

屈託のない笑みを見て、ゲールハーツはようやく笑うことが出来た。

あの災害でただひとり生き延びた彼は、様々な物語に現れては魔王を征伐する伝説の勇者に心酔するようになった。

そして、いつか勇者のような英雄に仕える事を夢見ていたのだ。

——そうだ、彼女が本物の勇者になれるかどうかは、自分の手にかかっているのだ。

——なんとしても、いや、たとえどのような手段を用いても、彼女に真の勇者としての力に目覚めてもらわなければ。

——そのためには、命の一つや二つくらい危険にさらしても、構うまい！

ゲールハーツの手記（イーサファルト王立博物館貯蔵品）より抜粋

彼が生涯で二度目に目撃した赤い星は、その頃まだ南の空に輝い

ていた。

その姿は、気のせいかな日増しにだんだんと大きくなってきているような気さえた。

公爵領ホルト高地

偽りの金塊、お化けネズミの爪、闇コウモリの目玉、マッド・オックスの心臓。その他の数種類の材料を混ぜ合わせ、鍋で煮詰めること数時間。

出来上がった魔法薬^{エリクサー}を眺め、眉をしかめ、ミュシャはもう一度魔法道書を見た。

……飲み薬ではあるまいな。

アンドラハルの魔族が扱う魔法体系は第七属《天魔法》と呼ばれている。

いまだ決定していない『運命』を決定する魔法。

また、その運命を決定する力を応用して、さまざまな物を操ったりする。

庭に出たミュシャは、光る五本の指をばらばらに走らせ、空中に複雑な模様を書いていた。

意味を持たない単語や文字列に意味を持たせ、格段に扱いやすい魔法を編み出しているのである。

「……単位呪文『S/I/E』は各々《ペリル・モンドの術式》を発動する……

……そのうち『S』は火の精霊マクムン・ドウシュの『ファイアLV1』を……

……また『I』は風の精霊シジェールジエムの『ショート・ブリズLV1』を……

……また『E』は土の精霊ドルドヌークの『標的設定α』を発動する……

……最後に魔法文字『アーケス』は複合呪文『S・I・E』を発

動する……」

一般の天魔法とは多少異なる、王家にのみ伝わる格式張った式である。

彼の呪文によってそれぞれの運命が決定され、複数の精霊が彼の周りに募り始めた。

いける。魔道書にあったとおりだ。

この薬は、確かに彼の魔力を増幅させてくれている。

ミュシャは力が蘇ってくるのを感じて、おもむろにひときわ大きな図形を描いた。

「『アーケス（□）』！」

四角形の光の輪っか空中に現れ、下をのぞく三つの辺に光が宿り、それぞれから、ばりばりばりっ！ という音と共に白煙が舞い上がった。

彼が出したかったのは光と煙と音ではなかった……どうやら失敗である。

しかも間の悪いことに、ちょうどエーサがやってきていたらしかった。

彼女は庭で魔法の練習をしているミュシャを見て、目を丸くしていた。

「あっはっはっはっは、ごきげんよう、ミュシャさま、ところで、さっきのはいったい何の魔法でござりまするか？」

「くっ……笑っている」

ミュシャはばつの悪い顔をして屋敷に引っ込んでいった。

屋敷の奥に入ってゆくと、大鍋の部屋には棚から机の上まで、至る所に瓶が置かれていた。

器の形をした物はすべて、どれも深緑色の魔法薬エリクサーが詰まっている。両手に持ちきれないほどの瓶を抱えたエーサが、目を星で一杯にして歓声をあげた。

「う……うわあゝっ、こ、こ、こんなに沢山の魔法薬エリクサーを、たった一晚で作られたのですか！ 一体、どんなご褒美をくださるおつもりにござりまするかあゝっ」

「お前の分じゃない、それ以前に、お前の薬の使い方に関する認識は絶対に間違っている……」

「はっ、も、申し訳ありません……ミユシャさま、ところで、どうしてこんなに沢山お薬をつくられたのでござりまするか？」

まじめに質問を受けたミユシャが、

「もうお前が屋敷こしに来なくてすむように」

と、答えると、エーサは

「いらんわーっ！」

と言つて抱えていた瓶を投げ捨てた。

「ああもう、こんな辛気臭いところにいたのでは、ご病気をめされてしまいまする！ いま、町は収穫祭をしている最中で、露天やら大道芸やらがたくさん集まって賑やかでござりまする！ ミユシャさま、きつと楽しいので、お外に参りましょう！」

こんなに沢山の人間がこの土地に住んでいたことを、ミュシャはここに来るまで知らなかった。

このホルヘ高地は魔界と人界の中間、いわゆる緩衝地帯だった。日の注さない土地を好む魔物は好んで住み着かず、人間も麓との交通が不便なため定住することはなかった。

少なくとも、彼が人界に戦争を仕掛けたとき、この山には山頂に古代遺跡があっただけの寂しい山だったはずだ。

水を売る露天を営んでいた主人は、にこにこして小銭を数えながら教えてくれた。

「この町はつい最近できたもんだよ。公爵様が去年の戦争のときにここに砦を建てて、魔族の侵略を御料地の手前で食い止めたんだ。公爵様はその功績が認められて、ここに新しい町を築く事を許された。ほら」

彼が指差す方角を見ると、色鮮やかな三角旗の向こうに、針山のような要塞が見えた。

公爵の砦、いまは公爵の居城だ。

「魔界と隣り合わせの土地だが、こうやって公爵様がにらみを利かせていてくださるお陰で、俺たち平民も平和にいらしているのさ」

「ヘゲニ公爵さまって、偉いお人だったんですか？」

「そりゃそうよ。なんせ前回のドラゴン・ライダーの星に選ばれた勇者さまだからな。勇者さまってのは、こうでなきゃいけねえ」

エーサは水の入ったカップを持ってきて、ミュシャに手渡すと、その隣にどっかりと腰を下ろした。

冷たい金属カップのふちに軽く口をつけて、ミュシャは尋ねた。

「今日は一体どんな用事で来た？」

「……回復薬^{ポーション}を作っていたきたいのであります」

エーサは祭りの空気にそぐわない浮かない顔をしていた。

見たところ鎧は新品になっているし、剣も幾分グレードアップしている。

それ以外は怪我もなさそうに見えた。

「怪我をしたのはわたくしではないのであります」

「ほう」

「ゲールハーツ先生であります」

エーサは人差し指を自分の目の下にあてがい、目頭から目尻まで、ぐいっと短い弧を描いた。

「剣術の稽古中に、手が滑ったのであります」

「お前がつけたのか？」

「……」

エーサはうつむいて、不意に泣きそうな顔になった。

「ミュシャ、勇者になると言うことは、戦わなければならないという事にござりまするか」

「ああ、そうだろうな」

「私は剣が恐ろしいのであります。剣を見ると、震えが止まらないのであります。今も、先生を傷つけた感触がこの手に残っております。ミュシャ、わたくしはあなた様のような人になりたいのであります。あなた様のようにお薬を作って、誰ひとり傷つけることなく、人を癒しながら生きるような生き方がしたい……それは

勇者にはできない生き方なのでありますか？」

ミュシャは、ふむ、といって、空になった金属カップを脇に置いた。

マントのしたから葉巻を取り出すと、魔法で熱くなった親指に押し当て、火をつけた。

葉巻に火がつけられるようになっただけでもよしとすることにした。

「……申し訳ありません、あなた様に聞いてもせん無いことを」

「いや、よく分かる。私も父が王をやっていないければ、今ごろ何をしていたかと考える事もある」

「へ……」

「……」

「ミュシャさま、失礼ながら、あなた様のご職業は？」

ミュシャは、ふうとドラゴンのような煙を吹いた。

「王様」

エーサは目を丸くしたが、やがて秋空に響く大きな声で笑った。

「ただいまでござりまするー！」

屋敷の戻ってきたミュシャとエーサを、一匹のお化けねずみが出迎えた。

まるで野性味のない動きで、のそのそとエーサの足元に近づいてくる。

彼女は太った胴体をつかみ、よいしょと抱えあげた。

「おおー、そなたも無事であったか！……むっ？　そこはかとな
く痩せてはおりませぬか？　ミュシャさまー！　ちゃんと餌はお与
えになられておいでなのですかー！？」

「私の手からは食わんのだ」

どうやらこのねずみに情が移ってしまったらしいエーサが、「城
では飼えないのでありますー」と泣きながら頼みにきて、以来ミ
ュシャが屋敷にかくまう事になったのだった。

お化けねずみは暗黒の半島アンドラハルに住むことができなかった
た魔物の中でも、日の注さない夜の時間帯からもあぶれてしまい、
ついには無理をして昼に出てくるようになった低級魔物である。魔
物というより動物に近く、ほとんど浄化されかかっている。

「しばしお待ちをっ！　今、わたくしが精のつく料理をお持ちいた
しますゆえーっ！」

エーサは大鍋の部屋に駆け込んで、なにやら部屋中を引つ掻き回
すような騒音を立てていた。

——薬を作つて、誰ひとり傷つけることなく、人を癒しながら生
きるような生き方がしたい——

果たして、そんな生き方が可能だろうか？

だが、魔界でも人界でもない、この狭間の土地でなら。

魔王として以外の生き方も、ひょっとすると可能ではないのだろ
うか？

そう思いかけた時だった。

——ミュシャさま。

不意に、ミュシャは時間が止まったように立ち尽くした。

足元のネズミは二本足で立ち、目を怪しい紫色に光らせていた。

——ご安心ください、私は《コツシユート》の者。先代魔王に忠誠を誓ったアンドラハルの竜族^{ドラゴン}にございます。今はこの魔物の体を借りてお話しております、ご容赦ください。

ミュシャは壁に背中を預け、目を閉ざしたまま天井を仰いでいた。

——ばかな、私は今、一体何を考えていた？

ネズミのほうに視線をおろすと、ミュシャは地獄のそこから響いてくるような声音で言った。

「……許す」

——はっ、現在、リノフの政権はシルト一族に完全に掌握され、アンドラハルの各地で暴虐の限りを尽くしております。わが国の動きをけん制するようにアリハラン、ソルベール、ヘルダームの三大国が同盟の離脱を宣言、反乱軍が起こした混乱は魔界全土にまで広がっています。

ミュシャは壁に後頭部を打ち付けた。

……なんてことを。

異形の魔物たちが各々の国家を築いていた魔界で、この同盟を築いたのは彼の祖先の偉業だった。

「反乱の首謀者はシルトの者か？」

——さよう、ゼブル將軍にございます。

先代の右腕だった男だ。

一体何を血迷ったか。

あの男ほどの切れ者なら、リノフにとってこの同盟がどれほど重要なものであったか、その価値が分からないはずはない。

——我々コッシュートは地下活動を通じ、シルト一族に反目する民族同士の結束を強めております。シルト一族の政権を廃し、ミュシャさまとその一族を再び王として迎え入れる準備を進めております。時が来れば、必ず我がコッシュートの竜がお迎えにあがりますゆえ。今しばらくのご辛抱にございます、ミュシャさま、どうか——どうか、ご無事で！

ミュシャが顔を上げると、エーサが大鍋の部屋からこっそり顔を出していた。

顔はなぜか煤だらけになっていて、どんな焦げ臭い料理ができたのかしのばれたが、彼女は満面の笑みをたたえてネズミを呼んだ。

「できましたでござりまする、ほかほかでおいしいですよー！」

気がつくと、ネズミの目から紫色の光が消えていた。

ひくひくと旨そうなおいを嗅ぐと、彼はミュシャの前から躊躇いなく消えた。

おしりを振ってよちよちと歩くさまは、まさにただのネズミだった。

公爵ヘゲ二

「——エーサさまは回復薬^{ポーション}を手に入れる為に、週に三・四回、多いときで五回、この屋敷の男のところに通っているものと思われます」

寝不足のゲールハーツは、ぼんやりと密偵の報告を聞いていた。運命の星が現れてからはや半年、躓きながらも鍛錬を積み重ね、徐々に勇者らしい力を身につけてきたエーサであつたが……。やはりときどき彼らの目をかいくぐつては、城を抜け出していたのである。

ふらつと外に行つたまま、夜まで戻つてこない事もあつた。公爵に知られれば首どころの騒ぎではない、これでは落ち落ち寝ても居られない。

いったいなぜ。これは何かある、と思つて、密偵に探らせていたのだが……。

「……伝説の勇者さまとあろうお方が……まさか、『男通い』をなさつておいでとは……」

密偵はひそひそ声で報告した。

「エーサさまがたびたびアイテムを収集しておられるのは、彼からもらつているクエストのようです」

「クエスト……」

「はい、その内容から推察するに、どうやらその男は魔法使いのようですな」

「けしからん、魔法使いからクエストをもらつていたというのは……なんとも怪しげな魔法使いだな」

実直な性格のゲールハーツは、不満を隠そうとしなかった。そのせいか、教え子のエーサとの関係についてたびたび変な噂が立つのだが、本人はまったく気にした風ではなかった。

「その、魔法使いとはどんな男だ？」

「はい、素性は不明ですが、かなりの美形のようです」

「美形か、曖昧な表現だな……もう少し詳細を聞けないか？」

「はい、その魔法使いは異様に背の高い色白の男で、しかもかなりの魔法の腕前（美形）と聞いています。自ら光る白髪と、見る角度によって色が変わる不思議な目を持っており、着崩れしたワイシヤツをだらしく身につけ、しかしとてつもない一霸氣の持ち主（美形）です。主に食べているのは屋敷に備蓄してある薬草や木の実の類を使ったパンやスープであるらしく、以前、エーサさまのほつぺたについていた食べかすを分析してみたところ、おそらく男は相当の一グルメ（美形）かと思われ——」

「はっ！？ 言葉の一つ一つが『美形』に聞こえるっ！？ なぜだ、そこまでコンプレックスを抱いていたというのか、この私が！」

幻聴を追い払うように耳をふさいで、ゲールハーツは唸った。

このごろは寝不足のせいもあってか、彼は妙に苛ついていた。

その原因も勇者がらみであることは間違いなく、城内にさらに色恋沙汰の噂を呼んでいた。密偵もいつ自分が八つ当たりされやしないかと、心なしか青ざめてさえている。

生真面目なゲールハーツは決して八つ当たりなどしないのだが、テーブルの上で親指を打ち合わせ、かちかちかちと周囲を不安にさせる不快な音を立てていた。

「魔法使いか……ふん、私がこの世で最も忌み嫌うジョブだ……そうか、それで彼女は魔法の授業だけは熱心に受けているのだな……私の剣の稽古をおろそかにするのはそういう裏があったのか……い

けない、これはいけない兆候だ……！」

ゲールハーツの中で対抗意識がめらめらと燃え上がった。

「いかんっ！ 魔法などもつてのほかだっ！ 伝説の勇者さまは、白兵戦でガンガン敵にぶつかってこそ……数多くの傷を作ってこそ、伝説にもなれるというものだ……っ！」

嫉妬に打ち震えるゲールハーツだった。

密偵はなるべく目を合わせないよう、資料に目を落としてさりげなく呟いた。

「それと……その魔法使いは、今夜城に来る予定となっております」
「なんだとっ！ い、いかん、それはいかん！ この魔法使いの事が公爵さまのお耳に触れてしまつては、軟弱な『魔法使い勇者』などというものが公認されてしまう恐れがある！ 教育係の我々の首もただではすまんぞ！ なんとかしても止めなければっ！」

「いえ、恐れながら……それがもう、この魔法使いのことは公爵殿下のお耳に入つてしまひまして……」

あぜんとするゲールハーツに、密偵はさらにおそろおそろ付け加えた。

「公爵殿下が、その男を今日の晩餐にお呼びになったのです。是非とも会いたいとの仰せでした」

「……」

晩餐に呼ばれるほどお気に召されたということだろうか。
ゲールハーツは、ぎりりつと歯をくいしばった。

相手はすでに公爵公認。こちらは首も危うい立場である。

だが……彼は逆境になればなるほど燃えるタイプだった。

「ふっ……直接対決というわけか……！　いいだろう、魔法使い……！　どちらが勇者さまの教育係としてふさわしいか、はつきりさせてやるうじやないか……！」

その日の夕刻、ミュシャは屋敷の一室で漆黒のマントにくるまり、ずっと横になっていた。

窓の外はしんと雪が積もっている。どうやらこの時期、彼はインフルエンザにかかっていたらしい。

エーサは薬の材料を取ってくると言って、丸一日戻って来なかった。いまごろ危険な目に遭っているのかもしれない。

——まずいな、このままでは、本格的にまずい。

ネズミを暖房代わりにして抱きかかえ、なんとか体力を温存しようとしていると、ドアを激しく叩く音がした。

この屋敷にやってくる人物は、エーサかその追っ手と限られている。

ふらふらと立ち上がり、ようやくの思いで玄関にたどり着いた。ドアの向こうに待っていたのは、エーサではない方の来訪者だった。高級そうな鎖帷子に身を包んだ髭の兵士だった。

「ヘゲニ公がお呼びである！！　表に馬車が用意してある、至急乗れ！！　すぐに出発する！！」

ヘゲニ公って誰だ……。

ミュシャはぎんぎん痛む頭を抱え、無理だとは分かっているけどアの向こうに魔法をぶっぱなしたくなかった。

ヘグニ公爵とは面識こそ無いが、彼はかつてミュシャと戦ったことがある相手だ。

ミュシャが人界に放った軍団を、この土地に砦を築くことで食い止めたほどの実力者だという。

話半分に聞くだけでも先見の明のある男のようだ。

ならば当然、魔界で起こった事情にも精通しているはずである。

リノフの内乱を期に、人界からもなんらかの行動を起こそうとしているのかもしれない。

少なくとも、彼のような怪しい魔族が領地に潜り込んでいる事など、とうの昔に気づいているにちがいない。

そうだ、つまり、これは――。

公爵はミュシャを元魔王ではないかと疑った上で、話し合いのテーブルに誘っているのだ。

ただの夕食会だと思ってばやばやしてはならなかった。

馬車から降りた瞬間から、ミュシャは王族の空気を取り戻していた。

漆黒のマントを羽織り、高熱にうなされている事などおくびにも出さない堂々とした足取りで城内を進んでいった。

落ちぶれても魔王である、その顔つきや態度を見て、すれ違う者達が、あれは一体どこの貴族かと噂せずにはいられなかった。

公爵城は剣山のような本殿と、無数の風車塔から成っている。強風を利用して水源を確保していることが窺えた。

ミュシャが案内された食堂はひどく薄暗く、窓の光が遠いぶん肌寒かった。

扁平な石造りで、片面に二十名ほど座れそうな長い食卓の向こう側に、小柄な灯鬼^{インブ}がひとり腰掛けている。

いや、灯鬼^{インブ}ではない。よく見るとそれはしわくちやの人間で、豆のように矮小な老人だった。

「掛けたまえ」

老人は従者からナプキンをむしり取って口元を拭いていた。ミュシャは黙って、彼の真向かいの席に腰掛けた。

「君が噂の魔法使いくんか。想像以上に若くて驚いたな」

「余計な前置きは必要ない、公爵殿下。用件から話してくれ」

今は一刻を争う事態だった。

ミュシャはテーブルの上のご馳走を放置したまま、じつと公爵だけをにらみつけていた。

想像以上に年老いている。

二十年前の星に選ばれた、前回の勇者だ、年老いていて当然だろう。

ヘグニ公はにまにまと笑って、塩漬けの肉にかじりついた。

「なるほどなるほど、凄まじい覇気だ。ゲールハーツが気にかけるほどの事はある。おい、ゲールハーツくん」

名前が呼ばれると、テーブルについていたもう一人の人物が立ち上がった。

緑色の鎧に緋色のマント、近づいてよく見ると、灰色の目の下には船の形をした傷跡がある。つい最近できた傷のようだ。

——こいつか。

彼がエーサに剣術を教えていた「ゲールハーツ先生」と呼ばれる男だ。

「紹介しよう、彼はゲールハーツだ。わしの親戚に当たるアルト公に仕えていてな。勇者に剣術指南をしてもらっている」

ゲールハーツは柔和に微笑み、常人離れた分厚い手のひらをミュシャの方に差し出した。

だが、ミュシャはその手を取ることもなく、彼をぎろりとにらみかえた。

ぴくつと、こめかみがひきつったように見えたが、ゲールハーツは取り乱したりせず、折り目正しくお辞儀をして、元の席に戻っていった。

——こいつ、ただ者ではないな。

その後ろ姿を見ながら、ミュシャは思った。

特に手だ。彼の手は常に剣を抜ける位置から離れない。

しかも、一見優しそうな目には殺意をたぎらせていた。

警戒心をむき出しにしているのはお互い様というわけだ。

ヘグニ公爵はフォークを杖のようにふりながら、おしゃべりを続けた。

「勇者さまとは随分仲がいいと聞いている」

「向こうが勝手に寄ってくるだけだ」

「さすがいい男は言うことが違うな。そこでひとつ頼みを聞いて欲しいのだが……」

来た。ミュシャは全身をこわばらせた。

用件を言う瞬間、ヘグニ公爵は小さな体をさらに縮め、全身から凄まじい殺気を放った。

「勇者さまには金輪際、近寄らないで貰いたい。それと勇者さまに関する情報は我が国の機密事項だ、一切他言を禁ずる。もし約束に反した場合は相応の処置を執らせて貰う。言っている意味は分かるかね？」

「……」

ミュシャは、しばらく答えに間を置いた。

むろん、魔王を晚餐に招いておいて、こんな用件だけで話が終わるはずはない。

ただの第一条件だ。べつに悪くはない条件だった。

「ああ、約束しよう……」

ミュシャは請け負った。

「その代わり、最近屋敷をうろついている密偵をどうにかしろ。あれはお前の所の者だろう？ 朝から晩まで私を見張るのはいい加減やめさせろ」

すると、ヘグニ公爵は表情を一変させて、かっかつかと大笑いした。どこをどう作ったのか分からない作り笑顔だった。

王族であるヘグニ公爵と臆することなく会談を続ける魔法使いを

見ながら、ゲールハーツは独りごちた。

——似ている。

不思議な容姿だった。

自ら光るような白髪、白い肌、不思議な色の目。

それらの特徴はことごとく、彼が二十年前の戦争で目撃した魔王と一致していた。

似ている、あまりにも似ている。

だが、あくまで似ているだけにすぎなかった。

顔の作りも違えば、特に目の色がまったく違う。

まとうている雰囲気も彼の方が数段若い。ひよつとすると、年齢的にはゲールハーツよりも少し若いのではないかと思われた。

聞くところによるとアンドラハル半島は一日中濃い霧に覆われ、

日が射さない土地柄なのだそうだ。そのため、そこに住む亜人の魔族はみな肌が石灰のように白いのだという。

ひよつとすると……この男は魔族ではないのだろうか？

塩漬け肉が想像以上にマズくて顔をしかめているミュシャを見ながら、ゲールハーツはひとり考えていた。

——いや、もし彼が魔王だったら、晚餐に呼ばれて、のこのこと顔を出す訳がない。

——ここは勇者の城だ。一体どんな理由があればこんな会食が成立する？

——そうだ、似ているだけだ。彼はただの薬を作るのが上手な、魔族顔の魔法使いにすぎない。

ゲールハーツの手記（イーサファルト王立博物館貯蔵品）より抜粋

ようやく迷いを振り切ったらしい、その後、ミュシャを見るゲールハーツの顔つきはいくぶん穏やかになり、晚餐も始終穏やかな雰囲気に進んでいった。

——おかしい。

会食が始まってから一時間、ミュシャはようやく何かが変な事に気づき始めた。

——おかしい。さっきから世間話しかしていないぞ。

ミュシャが第一条件を呑んでから、公爵の話はだいぶ遠いところまで進んでいた。

「……それでわしの姪のリベルダ公のところには優秀な魔法使いが多いのだ。いつも自慢話を聞かされていてね。それで三十年前に魔法使いを育てる士官を探していたのだが、なかなかこれといった人材が見つからなくてね……。だが、そんなときに現れたのが『テーズ』という名の預言者で、わしは彼の助言に従って……」

完全な世間話である。次の条件が出されるところか、一時間あまり世間話しかしていない。

核心となるはずの魔界での内乱や、失脚したミュシャがどうしてこの土地に逃げてきたのか、などの話は一向に始まる気配もなかった。

おかしい、何かがおかしい。と、思っていると、不意に公爵は、

はあ、とため息をついた。

「本当は君の情報を密偵から聞いたとき……彼の事だと思ってたんだがね」

「？」

「『テーゼ』だよ。わが国きつての預言者だ。ひょっとして名前を知らないのかな？ 魔法使いを見つける方法を助言したのも、ここに砦を築くように助言したのも、伝説の勇者の出現を予言したのも、すべてその預言者だ。……だが、彼は伝説の勇者の出現を予言すると同時に、失踪してしまった……」

ミュシャもゲールハーツもぼかんとして声を出せずにいた。
人違いをしていた……というのか？

公爵はばんつとテーブルを叩いて、声を張り上げた。

「よし、決めた！ ミュシャくん、しばらく様子を観察していたが、わしは君を只者ではないと見た！ その回復薬を作る腕を見込んで、どうかね、わしの軍隊の薬師になる、というのは！ 将来的には勇者のパーティに加わってもらうこともあるかもしれんぞ、さらに巧くすれば、勇者が王に謁見するときには、その末席にちょこつと出させることも……」

急なめまいを覚えて、ミュシャは、ごちん、とテーブルに頭を打ち付けた。

——勇者の仲間になれというのか！

今まで無理をしてきたのが祟ったのだろうか、しばらくその姿勢から動くことができないでいた。

——私の正体に気づいてすらいない！

——そうか、こいつは預言者がいないと何もできない、ただお喋りが巧いだけの老兵だ！

ミュシャはおもむろに立ち上がると、思わずひっくり返りそうになったヘグニ公爵を見下ろし、はつきりと言った。

「悪いが、興味が無い。他をあたれ」

啞然とする公爵を残し、ミュシャは足早に城から退出した。

歩いて帰ろうとするミュシャだったが、後から兵士が追いかけてきた。

「公爵様からです」

おそらく口止め料だろう、彼に銅貨のつまった袋を渡した。

下手に追い回すより、王族としての懐の大きさを見せつける慣わしなのかもしれない。

が、それにしては銅貨の量が多い。それなりに重要人物とみなされているようだった。

ミュシャは、ふん、と笑って、口止め料を受け取ることにした。相手のつばをわきまえて、的確についてくる。どうやら仲間集めは得意なようだ。

「前勇者か……食えんじじいだ」

剣豪サージ・大剣使いイーラ

ホルト高地の天候は変わりやすい。午後に降り始めた雨は一向にやむ気配はなく、なだらかな山裾の馬小屋を包み込んでいる。

馬小屋には数頭の馬とエーサがいた。

せっかく手に入れた貴重な薬草が水に濡れてしまわないよう、鎧の中に隠して、彼女は雨の降りしきる草原をじっと眺めていた。

「なかなか降り止まないでござりまする……困りましたのう」

やはりミュシャの助言をもらえなかったのがいけなかったのか。すぐに戻るつもりが、今回のクエストは材料を手に入れるだけで丸一日かかってしまった。

帰ったら、ゲールハーツは怒るのだろうか。

ごしごしと顔をこすったら、弾みで涙がでてきた。

「ひつく……つつ……」

エーサはくしゃつと顔をゆがめると、肩を揺すって泣き始めた。馬たちも様子が気になるのか、この闖入者を心配そうに見つめていた。

そんなとき、とつぜん馬小屋に剣を担いだ少年が訪れた。

つつん尖った髪、鋭い目つきに尖った細い顎、刃物のような鋭い印象を受ける顔立ちだ。

「ごめん、馬欲しいんだけど」

エーサが何より驚いたのは、その鎧だった。こんなに強烈な赤色の鎧は見たことがない。

まるで血に一晩漬けていたように真っ赤なのだ。

「ん、この鎧が気になる？ ショップがあつたら教えてあげたい所だけど、残念ながらこれは世界に一個しかないくらいレアなアイテムだから。」

西部を旅している時に見つけた『紅鉄』ってやつを砂漠のドワーフの職人に鍛えて貰ったの。

俺はいつも傭兵みたいな事をやって日銭を稼いでるんだけどさ、この鎧を着て任務に失敗したことは一度も無い。

なぜなら敵がみんな俺に向かってくるんだ。ところで馬欲しいんだけど？」

エーサはぽかんと口を開けて、馬小屋に並んだ馬たちと、突然現れた真っ赤な鎧の男を見比べた。

「馬……でござりまするか？ 分かりませぬ、わたくしはこの者ではありませぬゆえ……」

「考えている暇はないわ、サージ。借りて行きましょう」

エーサはぎゃつと悲鳴を上げた。

真っ赤な鎧の男の向こうに、なにか巨大なモノを担いだ人影があったのだ。

一体何を担いでいるのか一目では理解できない。お城の建材か何かのようにも見える。

かなり長身の女性であるらしく、男の頭越しにエーサを見下ろしている。

「町が焦土になるといふときに、馬二頭いなくなったところで誰も気づきはしないわ」

「どうせその剣運ぶのに馬二頭使うだろ？ 四頭同時にいなくなっ

たら馬使いたい他の奴が大変だろ」

「私が貴方を負ぶって走ったら万事解決よ」

「そこまで弱っちゃねえよ俺は……まあいいか、事態が事態だし」

二人は勝手に馬を借りていく事に決めてしまったらしい。

人が見ているというのに、なんと大胆な馬泥棒だろう。

ずかずかと馬小屋に入り込んで馬を選び始める二人の前に、エーサは立ちはだかった。

「……お待ちください！ 黙って持つて行っではいけません！」

「なんだよ、あんたの馬か？」

「いえ、ちがいます……けど、そうかもしれないのであります……」

エーサの声はだんだんと弱々しくなっていた。

「わたくしは、自分が一体なものなのか、よく分からないのであります。」

見知らぬ世界に迷い込んで、見知らぬ人々に、あなたは勇者だなどと言われてしまったのであります。

いまこの瞬間にも神様が現れて、お前はこの馬小屋の主だとお告げになられてもなんら不思議ではないのであります」

真っ赤な鎧の男は興味なさげに馬の頭をなでていた。

「ふうーん、勇者ねえ。勇者って赤い星の英雄のことだろ？ 心配ないよ、だって勇者は俺だもん。俺よりそのカラーが似合う奴なんていないじゃないか。嬢ちゃん、見たところ戦いなんてできそうにないだろ……よっと」

やがて馬の背に飛び乗って、そのまま小屋の出口に向かった。
エーサはその馬の鼻面を抱きかかえ、動きを制していた。

「嬢ちゃん、どいてくれ。勇者が通るんだ」

「……通しませぬ」

エーサは首を振った。

「……元いた世界がどんなところで、わたくしがそこで一体何をやっていたか……あなた方には想像もつかないと思いまする」

顔を伏せたまま、エーサは静かな声で言った。

「……毒を盛って、人を殺したのであります。……大切な人をこの手で殺して、追われて、この世界に迷い込むまで、わたくしはただひたすら逃げていたのであります……どうして神様がわたくしを勇者に選ばれたのか、まるで分かりませぬが……戦うぐらい、どうという事はないのでございまする」

「じゃあなんで泣いてんのさ……」

真っ赤な鎧の男は肩をすくめた。

女性の方も二頭の馬に建材を担がせ、自分も一頭の馬に乗って出口にやってきた。

「サージ、馬が通れないんだけど？」

「だめだ、この勇者さまが断固として俺を通さない構えらしいんだ」
「だから、その勇者さまをどかすためにあんたが邪魔になってるんだけど？」

「……イーラ、お前にとって俺はなんだ、そんなに邪魔か？」

真っ赤な鎧の男が退くと、女性の馬が前に進み出てきた。
馬はエーサの黒髪をもしやもしやと食べていた。

「あなたは戦いを軽く見ている。真実なんて誰にも分からないし、誰が最も正しいかなんて誰も教えてくれない。

剣を振るう事だけが戦いじゃないわ。戦うことの意義を見つけ出して、堅く信じることも戦いだし、一つの価値を守り抜く事も戦いであるの。

あなたはまだその二つを手に入れてすらいらないじゃない。戦う以前の問題よ。

これから大きな戦いが始まるけど、あなたはずっとここで馬小屋を守ってなさい、その方がお似合いよ。

けど、私の邪魔をするのなら……ここには真っ赤な血が大好きな『剣豪』がいるわ」

そう言って、彼女は真っ赤な鎧の男を見た。彼はぶんぶん首を振った。

「俺にどうしろっていうんだ……」

「……使えない奴」

「ああっ！ 使えないさ、悪いか！ お前に良いように使われてたまるか！」

サージが大声をあげた直後だった。

ふいに地響きがして、馬たちがとつぜん騒ぎ出した。

「……来た！」

「構っている暇はないわ、急ぐわよ！」

冒険者達が強引に馬を突進させてくると、エーサは思わず横に飛

び退いた。

四頭の馬が小屋から飛び出し、大きな建材が小屋の入り口を二カ所切り裂いていった。

彼らの向かう先に、エーサは異様な影を見た。

それは空を覆い尽くすほど巨大なドラゴンの腹だった。

その影はあっという間に頭上を通り過ぎ、冒険者達と併走するように、町の方に向かって飛んでいった。

賢者オルフェウス

「テンベスト・ミル《嵐の風車》か……」

サージは不機嫌そうに眉をしかめて、ミュンの会話に割って入った。

今のうちに体力回復をはかったのか、回復薬をポーションを一気にあおった。

「俺の冒険人生における、嫌な事件ナンバー八に入るあれだな」

「ああ、あの襲撃事件のドラゴンね」

隣にいたイーラがさらに言葉を繋いだ。

彼女はあまり過去に心が揺さぶられるタイプではないらしい、彼とは対照的に眉一つ動かさなかったが、冷え性なのか時々腕をさすっていた。

「勇者が空を飛んで、ドラゴンぶった切っちゃったやつ？」

「だから、ぶった切ったの勇者じゃないだろ？ えっ、お前なんでここまで来て俺の証言よりも俗説の方信じちゃってるの？ そんなに信用無いの？」

「あの、町の八割方が焼き払われたっていう、あの事件か？」

アツカは吠えるように口を開いて、驚きの声を上げた。興奮ぎみにへっへっと笑っている。

「へえ、偶然だな、俺も巻き込まれてたぞ、それ。世間は狭いつて奴だな」

「そりゃあ、公爵領の数千人が巻き込まれた大事件ですからね。なにしろ……」

オルフェウスは眼鏡の座りを直して、そこにいるゲールハーツと勇者を除く、六人の仲間達を見渡した。

「あの事件をきっかけにして、この《魔王討伐軍》が組織されたんだ。第一次メンバーは全員、あの事件をきっかけにして結びついたようなもんですよ」

「あの、私は……」

サーラもおずおずと手を上げた。いちいち手を上げないと、彼女の声量ではみんなに聞こえづらい。

「故郷で……あの……事件の噂を聞いて……その、公爵領の、沢山の人が……怪我を……して、いるらしいって、それで……お手伝いを……したいなーと……」

「《魔王討伐軍》の？」

「いえ……『聖堂を壊した』と聞いて、本当はお小言を言いたくて……けど、ゲールハーツさんと、お話するうちに……いつの間にか……わたし……ここに……それで、事件のこと……よく、知らなくて……」

サーラは中部の言葉があまり上手く使えないので、雰囲気にならされて一緒に行軍について行く事になってしまったらしい。

「強引だな、ゲールハーツのやつ」

「あいつが人の意見を聞いたことが一度でもあったか？」

「じゃあ、サーラはあの事件の事はほとんど知らないわけですね……」

そう漏らしたオルフェウスに、不意にアツカやサージから非難が

ましい視線が集まった。

「おいおい、俺も大まかな所しかしらねえよ」

「事件が大局的に見えてんのは、軍の中にいる奴ぐらいだろ？ 結局あれ、どういう戦いだっただんだ？」

「ええっ、そ、そりやそうか。ええと、簡単に説明すると……」

そう言っ、オルフェウスが事件の日を振り返った。

「ドラゴンは南西からホルト高地に現れ、町をひとつひとつ破壊して回っている」

公爵領《リーベの町》を守護する砦の一室に、ヘグニ公爵領の士官達が募り、頭をつきあわせていた。

「強烈なプレス攻撃を使うが、最初のうちは直接人に使う事は無い。主に建物の破壊や進路の寸断を行っている」

「最初のうちは——」

「つまり、なるべく町の中央に人を集めようとしている。……ここより南のカデンの町はひどい有様だった。」

ドラゴンは混乱する群衆の上を旋回して、一通り真上から眺めて、最後にプレス攻撃で町を跡形もなく消し去って、それから次の町へ移ってゆく」

「ばかな——」

居幕の中は冬だというのに蒸し暑く、話し合っている兵士達の顔は汗でびっしょりだった。

心持ちではなく、話し声もだいぶ小さくなっていた。

「ドラゴンの目的は一体なんなんだ？ 人を食らうでもなく、勇者さまのいる公爵の砦を襲うでもなく、ただ町をひとつひとつ、手間をかけて破壊してまわっている？」

「愉快犯……のようなものでしょうか？」

そう発言したオルフェウスに、士官達の視線が集中した。

一番年若いオルフェウスは、怖じ気づいて口づぐんでしまった。

「彼の名は？」

「オルフェウス」マグナティウス、スタンリー伯爵に仕える準大魔導です」

準大魔導は魔術師部隊の中ではふつつ三人しかおらず、この上にあるポジションは大魔導ただ一人である。

……といっても、イーサファルトは昔から魔術師が少なく、公爵領の魔術師部隊の中でも、ほんとうに魔法の使える者はたったの十五名しかない。

あとの大半は魔法銃を重用し、もっぱら彼らの護衛をしたり、移動や運搬のサポートをしたりする足軽で構成されている、非常に小さな組織だった。

イーサファルトでは希な魔法が使えるオルフェウスは、十六歳になって成人してからたった三ヶ月という驚くべき早さでこのポジションを手に入れてしまったのであるが、特に驚くべきことではなかった。

「いや、続けてくれ」

騎士の鎧に身を包んだ男が、彼に先を促した。

この公爵領では見たこともない、落ち着いた灰色の目の男だった。左目の下には船の形をした向こう傷がある。

隣にヘグニ公爵の側近が二人ほどいるので、他の伯爵の士官達も、誰かは知らないが位の高い騎士であることぐらいは分かるようだ。

「は、はい……ドラゴンは高等な呪文を扱える、魔術師のような知能の高い生物です……なので、だからこそ本来意味の無い破壊をして、ゲームのように楽しんでいるのかもしれないと……」

「ばかな……！ そんな理由でわしの町が破壊されたというのか……！」

憤った兵士が机をどすんと叩いた。

騎士は驚くほど落ち着いた声で言った。

「私も兵法者として、憤る気持ちはお前と同じだが、相手はドラゴンだ……魔術師の気持ちは魔術師が一番よく分かるだろう。君には、このドラゴンの目的が分かるのか？」

ここで答えをしくじったら首が飛ぶかもしれない。オルフェウスは地図をじつとにらみ据えた。

彼は町のほぼ中央にある祭りの広場を指さし、弱々しい声で言った。

「……広場です。聖堂前の広場には、上から見ても十分な広さがある。ドラゴンはそこに人を集めるつもりです」

「だそうだ、ほかに異論のある者はいるか」

その点では意見が同じである事を確認するように、騎士は全員を見渡した。

「私に考えがあるので諸氏に聞いて貰いたい。ドラゴンが人を一カ所に集めるつもりなら、我々は人を逃がしてドラゴンの動きを操ることができるかもしれない。つまり、我々が先回りをし、中央から町の外までの退路を作れば、ドラゴンはそれを封鎖するために動かざるを得なくなる」

騎士は、町中を流れる大水路に人差し指をおいた。

「この大水路から外に逃げられるかもしれない。この町の構造に詳しい者はいるか？ この水をせき止めることはできるか？」

「ええ、万一の時の避難路になっていますから、風車塔で操作すれば簡単ですが……しかし、この町だけで千人もの民衆がいます、どうやってそちらに誘導します？ 迂回路も多くて、とてもドラゴンがどう動くかまで予想できるものではありません、それこそ格好の標的になるのでは？」

「ならば、直線距離の退路を作ればいい。あらかじめ迂回路をすべて封鎖し、直線上にある建物の壁を破壊する」

「無茶な！ 聖堂があるではないか！」

一斉に避難の声があがったが、オルフェウスはこの騎士の意見に興味を持った。

あまりに先進的すぎる考え方から、教会の関係者からは異端の目で見られることの多い騎士だった。

故に、彼の戦いの功績はこれまでずっと隠蔽されている。

このドラゴン襲撃事件的一幕なども後に隠された功績の一つとなった。

「あんた、見ない顔だが、一体どこの騎士さまだ？」

「私はアルト公爵に仕える正騎士、《ゲールハーツィンデル》バレイ

《だ》

バレイ……？

顔は見たことがないが、名前だけはどこかで聞いた覚えがあった。というより、彼の部隊で兵士たちが使っている魔法銃の名前がそれだった。

オルフェウスが眉をひそめていると、ヘグニ公爵に仕える士官達は、全員その場にひざまずいた。

「立て、今は時間が惜しい」

「しかし……王子！」

王子だつて！？

誰かが不意に漏らしたひとことに、オルフェウスは目をむいた。

「立てと言ったのだ。立て」

ようやくまわりの士官達も、オルフェウスと同じ青ざめた表情で直立した。

ゲールハーツはその場にいる者が戦慄を覚えるほど怒気のこもった目をしていた。

どうやら、彼のその怒りは上空のドラゴンに向けられているようだった。

「案ずるな、聖堂が本当に神の建物ならば、いまこの瞬間に破壊される為に建てられたのだ。」

魔族を恐れてはならない、我々の頭上にはいまなお赤い星が輝き、地上には伝説の勇者がいるのだ。

ドラゴンごときに怯懦を見せてはならない、死力を以て討伐する、それが英雄の園イーサファルトに生まれた者の使命だと心得ろ」

人狼アツカ

ドラゴンによって作られた障壁は、ほとんどが鐘楼で出来ていた。中心部に聖堂を有するリーベの町は、公爵領の中でもとりわけ教会の多い土地だった。

鐘楼が地面に落とされるたびに、不気味なゆがんだ鐘の音が鳴り響いた。

ゲールハーツは白馬を巧みに操って障壁を軽々と飛び越え、石で舗装された通りを風のように駆けていった。

石造りの建物を見上げると、屋根の上には滑空を決め込んだドラゴンの伸びきった翼と、ノミの形をした顎がちらりと見えた。

ドラゴンが遠ざかる隙について工作を進めていたのだが、徐々に姿が現れるまでの間隔が狭くなってきている。

それはつまり、ゴールが間近だということだ。

お前は一体何を見ている？

ゲールハーツは心の中でドラゴンに問いかけた。

そんなに愉しいのか？

悲鳴、怒声、罵詈、どれともつかぬわめき声。中央の広場からは、収穫祭をしのぐほどの凄まじい熱気が立ち上っていた

まるで鍋に閉じ込められたようである。今にも中にいる民衆が堰を切ってあふれ出しそうだ。

堪えていたつもりだったが、ゲールハーツの憤怒もそろそろ限界に差し迫っていた。

「ゲールハーツ様！」

「くわしい状況を聞かせろ！」

聖堂の裏手にあつまっていた兵士達は、青ざめた顔で口々に彼の名を呼んだ。

「その……それが、壊れません！」

「ありったけの魔石を使えと言ったはずだ！」

「使いました、火の魔石はすべて、ですがこの塀だけ、壁がとくべつ分厚く作られているようです！ 一発や二発では穴を貫通させられません！」

もう一度空を見上げて、ゲールハーツは対策を練った。

別の退路を、いや、それより先に、罠の位置をもう一度調整しなくてはならない。

だが、そのための会議を開いている余裕までは無い。

罠は諦めるのか？

ゲールハーツの脳裏には、過去の戦争の記憶がまざまざとよみがえっていた。

ほんのわずかでも生き延びる可能性があるのなら、罠を作ることを諦め、別の退路だけを作るべきだろうか？

それでも、もし数名が生き延びられたとしても、もう次の町はない。

相手はドラゴンだ、二度は同じ手は食うまい。

吐き気がしそうだった、ドラゴンを狩るために、町をひとつ諦めなくてはならない。

不意に、ゲールハーツの視界の隅に異様なものがうつった。

怪物のように大きな大男を、兵士達が数名がかりで引きずっていたのだ。

「隊長っ！ 不審者を捕らえましたっ！」

「こいつ、この騒ぎに便乗して、その食堂で食料を漁ってしました……ぎゃあっ！」

「がるるっ！ メシくってただけだっ！」

「嘘をつけ、この騒ぎのなかで平然とメシを食っていたなど信じられるかっ！」

「いたの！ 信じる！ バーリヤじゃよくある事なんだから！ ちやんと『いす』って奴に座って、『てーぶる』って奴の上で食べてただろうがよ！ なんか文句あつか！？」

「ナイフとフォークはどうした！」

「ナイフとフォーク！？ なにそれ！ オレなんか盲点があつた？」

毛糸の帽子を目深にかぶって頭部を隠していたが、口元は獰猛な野獣そのものの、のこぎりの様な牙をむいて唸っている。

麻縄に何重にも巻かれて、身動き取れなくされているようすだった。

士官の一人が、病気にでもなつたかのように顔を真っ青にして、ゲールハーツに言い寄った。

「ゲールハーツ様、恐れながら、私にはこの壁の向こうに家族がおります。それに、いささか楽観的ですが、ドラゴンも畏の危険に気づけば深入りをせず、退却をするかもしれません。そう申している兵士もここには大勢います、どうか、わずかでも可能性があるのならば……」

「……お前、バーリヤの魔法がどんなものか、聞いたことがあるか？」

「は？ なん、ですと……バーリヤの魔法は、治癒魔法でしょうか？」

「水魔法だ。再生と破壊を司る。治癒魔法に冷氣魔法、そして、どんな物でも風化させる破壊魔法だ」

小隊長が大男の対応に手間取っているところに、ゲールハーツは駆けつけた。

帷幕にいなかった小隊の兵士達は、ゲールハーツの事をまだなにも知らない様子でばかんとしていた。

だが、縛られている大男だけは違った。

彼は鼻をひくひくさせて、ゲールハーツが何か言う前に、こうもらしたのだった。

「へっへっへ……おまえ、ドラゴンと同じにおいがするな？」

ゲールハーツは心臓を射抜かれたように立ち止まった。

ドラゴンライダーの血を引くイーサファルトの王家には、ドラゴンの魂と英雄の魂が半分ずつ受け継がれているという。

——その言葉を聞くまで、私は自分が王族だったということを忘れていた、むしろ忘れようとさえしていた。

——私の中にドラゴンの存在を嗅ぎ取った男のその一言が決定的だった。

——その瞬間、私は騎士の身分に閉じこもったままであることを完全に捨て、彼を仲間にする事に決めていた。

（イーサファルト王立図書館貯蔵　ゲールハーツの手記　より抜粋）

「お前、名は」

「そんなもんあつかよ」

「『激昂^{アツカ}』か、なかなか洒落た名前だ」

「えっ、どういうこと？　ひょっとして今オレの名前が誕生しなか

った？」

「なるほど、さぞ力自慢なのだろうな。どの程度の力を持っているか、見てみたい。……お前ならあの壁を壊せるか？」

ゲールハーツの指差す先では、すでに大勢の兵士たちが壁を打ち壊す作業に取り掛かっていた。

向こうにいる人の声が聞こえるのか、みな死に物狂いだった。今にも泣きそうな顔をして槌を振るう者もいる。

アツカと名乗る大男は、太い首をぐいっとめぐらせて、へらへらと笑った。

「高くつくぜ？」

「三回で壊せたら見逃してやる、二回で壊せたら望むものをやる、もし一回で壊せたら……私の友になれ」

「くくく、言うことまでドラゴンくさいな、おまえ。さては王様かなにかか？」

縄が解かれると、アツカはおもむろに立ち上がった。

身に着けているのはボロボロのチョッキに、丈の短いズボン、よく見ると、足の付け根にぶらーんと獣の尻尾が垂れ下がっていた。後で適当に見繕ってやらねば、とゲールハーツは考えた。

聖堂の壁にその影が落ちて、壁にかじりついていた兵士たちが、ようやくその気配に気づき、振り返った。

アツカは兵士の一人から金槌をもぎとって、壁に向かって歩いていった。

左上から右下に、右上から左下に、ぶんぶんと金槌を振る。分厚い壁にぴたりと鼻面を付き合わせると、アツカの身長と堀の

高さは頭ひとつ分くらいの差しかなかった。すさまじい長身だった。

「さーて、一回にするか、二回にするか、そこが問題だよな……」

アツカはポケットから一握りの赤い土を取り出した。

その上にぺっと唾を吐くと、指で掬い取って壁に赤い線を書き始めた。

赤い六角形の図形である。

「『産みと苦痛の母ハルテルの血において命ずる、そは六である、再生と破壊をつかさどる水の理を^{いづれ}以って、すべての六は砂に帰すべし』」

西部の魔法に造詣のあるゲールハーツも、おそらくここにいる誰も見たことの無い呪術だった。

ひととおり赤い線を書くと、準備は終わったらしい。

おもむろに大腿から後ろに向かって金槌を振り上げ、今から殴りつける部分に真っ赤な手のひらを向け、金槌を振り下ろした。

「うおおおおおおーっ！」

がごおおおんっ！

常人の何倍もの量の筋力がすべて加わった、渾身の一撃だ。

周囲の地面にまで強烈な振動が伝わり、立っているものは体勢を崩した。

壁に不気味なひびが生じ、ひびから赤い砂が吹き上がった。

聖堂の壁は朽ちはじめるようにみるみる崩落してゆき、人一人分の大きさはあろうかという破片がぼろぼろと落ち、兵士たちはぶつ

からないように距離を置いた。

「一回ということにしよう」

などと言って振り返ったアツカの真上を、ドラゴンの白い影が砲弾のように通り過ぎていった。

ぎゅあうつうんっという耳をつんざく響きを残して、その影は瞬間的に通りの反対側まで飛んでいった。

こちらが体勢を立て直すところには、ドラゴンは翼を一度はためかせ、旗のように華麗に向きを変えてこちらに飛んでこようとしている。

どうやら聖堂の異変に気づいて急接近したらしい、とてつもない移動速度に士官たちは戦慄を覚えた。

「……速いつ！」

「ひるむな、魔術師部隊に合図を送れ！」

巨大なドラゴンは自然本来の力では空を飛ぶことができない、翼は補助的な力を得るために使い、多くは魔法の力に頼って空を飛んでいる。

この尋常でない高速飛行も魔法が可能にするものだ。

だが、相手が魔法を使っているのならば、同じ魔法の力を使う魔法使いならそれに対処できるはずだ。

聖堂の裏手には鐘楼が複数あり、それらにすでに魔術師部隊が潜伏していた。

鐘楼からいくつもの紫色の光が漏れ出すと、空中にあるドラゴンの巨体は、急に支えを失ったように高度を下げた。

ドラゴンがほえ声をあげるよりも先に、アツカが吼えた。

「す、すげーっ、本物のドラゴンだーっ！」

「効いている……！落ちてくるぞ！」

「ゲールハーツ様、下がってください、ここは危険です……！」

同時に、広場にあふれかえっていた人々が、塀の向こうから奔流となつて押し出されてきた。

ドラゴンが目の前にいるのにも関わらず、誰も留まる事さえできない様子だった。

混乱して他人を押し倒し、踏みつけ、ひたすら道のある方に駆けていった。

誰しも服が血に染まっていて、服装で身分を見分けるのさえ困難だった。

獲物を逃がされていることに気づいたらしい、上空のドラゴンがすさまじいほえ声を上げ、群衆が一瞬だが身をかがめた。

アツカがそれに負けないほえ声を上げた。

「おーい！でっかい穴が開いたぜーっ！あとで弁償してくれって言っても無理だからなーっ！」

「高度が屋根まで落ちました！」

「……弓矢隊に合図を送れ！」

通りの向こうを低速で飛んでくるドラゴンに向かって、鉤のついたロープが投げ放たれた。

さらに左右の建物の窓から弓矢部隊が狙い撃ちをする。

矢ごとくではドラゴンの堅い鱗に傷をつけられるはずはない、まともに当てる為に放った矢はない。動きをさらに抑えるのが目的だ。それでも目や翼の薄い膜に何本かが突き刺さり、ドラゴンは凄まじい咆吼をあげた。

「うおおっ、危ない、こっちに落ちてくるぞあのドラゴン！」
「怯むな！ 撃ち続ける！」

ドラゴンは数十本のロープに引つ張られて、船のように進行方向を変え、そのまま脇にあった建物に頭から衝突した。
建物は屋根から崩落し、ドラゴンは建物の一番下の階にうずくまる形で墜落した。

巨大な怪物が目の前に落ちている。

「やった」

彼らが落としたのだ。その事実が兵士たちの間に実感されるまで、しばらく時間がかかった。

「落とした、ドラゴンを落としたぞーっ！」

兵士たちは歓声をあげて、我先にとその巨大な怪物に群がっていった。

それは怪物と呼ぶにははばかれる、兵士たちが息を呑むほどの美しさだった。

鱗は淡い青色で、中に宝石でも入っているかのようにきらきらと輝いている。

馬よりも長くたくましい首を丸め、まるで貴婦人のように翼の中に顔を隠していた。

「はっはーっはっ、すばらしい、なんと、最高の獲物ではないか！」

遅れて馬を走らせてきた貴族が、どや顔で周囲に宣言し始めた。

「みなの方！ このドラゴンはわが侯爵家の石弓部隊が仕留めた獲物だ！ さっそくヘグニ公への土産としようではないか……あうっ」

名乗りを上げようとした部隊長が、なんの前触れも無く落馬した。周りには失笑が漏れたが、ゲールハーツはドラゴンをじっと見つめたまま、笑うことができなかった。

……抵抗しないのか？ なぜ火を噴かない？

……あるいは、わざと捕まった？

「ひ、ひいつ！」

悲鳴のした方を見ると、落馬した部隊長のそばにいた兵士だった。

「し、死んでるっ！ 矢だ、弓兵部隊の矢で射抜かれているぞっ……！」

兵士たちは一斉に上を見上げた。

通りをはさむ左右の建物には、ずらりと弓兵たちが並んでいる。

「一体なんのつもりだ！」

とつぜん敵意を向けられ、弓兵の部隊長らしき男が窓から顔を出した。

「まで、一体なにがあつた、こちらからは何も……！」

その弓兵の部隊長の胸に、一本の矢が根元まで突き刺さった。後ろから突き出た先端と矢羽を交互に見せながら、彼は三階ほど

の高さから落ちていった。

「なんだ、一体どうなっている……！」

「手柄を独り占めするつもりか……？」

「ふざけやがって……！」

兵士たちの間に怒号が沸き起こった。だが弓兵たちも当惑している、どうすればいいのか分からずにただ青ざめている様子だった。

徐々に統制が崩れつつあったとき、歩兵部隊のリーダーと思われる人物が声を上げた。

「待て、双方、冷静になれ！ 弓兵部隊、こちらの声が聞こえているのならば、弓矢の装備をはずし、窓の見える位置におけ！ 自分たちが犯人ではないという証拠を示せ！ 早く！」

リーダーの野太い声はよく聞こえたらしい、あわてて武装解除した弓兵たちの矢筒と弓、それにタガーが、見渡す限りの窓辺に並んだ。

頭のいい男だ、とゲールハーツは内心思いながら様子を見守っていた。

弓兵の中に犯人がいても、自分も武装解除をせざるを得ない。

この状態ならむやみに狙撃されることは無い。

狙撃を恐れていた歩兵たちも敵愾心を和らげ、落ち着きを取り戻しはじめた。

歩兵部隊のリーダーはふうむ、と唸って腕を組んだ。

どうやら弓矢部隊は全員が武装解除をしまったらしい。

だが、ゲールハーツは見てしまった。

家の中にうずくまっているドラゴンが、不気味な動きをしているのを。

翼に隠されたその目は、はっとするほど美しい緑色をしていた。まるで自分が捕まっているという感覚すら持ち合わせていないような、とてつもなく冷静で、動揺のかけらすら見えない目だった。

抵抗をしない。火を噴かない。

どうやらこれはドラゴンにとって、まだゲームの範疇だったようだ。

ドラゴンは翼の皮膜に突き刺さった矢をぶちっと抜き取り、口の中で転がしはじめた。

まずい、と思ったときには、その矢はドラゴンの口から音も無く放たれて、リーダーの首を貫いていた。

兵士たちは一瞬にして押し黙った。押し黙った瞬間、ドラゴンが立ち上がった。

ぶるぶる体を震わせてロープを簡単に解き、口の端から青白い炎を吹いた。

「まずい、まずいぞ、退却しろーっ！」

各々のリーダーを失った兵士たちは恐慌に陥り、あっという間に壊走しはじめた。

解放されたドラゴンは翼をはためかせ、難なく空に浮き上がった。

暴竜テンペスト・ミル

「だから人間がドラゴンを捕まえちまったんだよ！ 矢とか魔法とかぶっ放しまくってさ！ すげえんだ、お前も見りゃよかったのに！」

穴の開いた聖堂の近くで、尻尾の生えた大男が知らない男を捕まえて騒いでいた。

ドラゴンの元にようやくたどり着いた剣豪サージは、そんな声を耳にしながら息を切らしていた。

——おいおい、嘘だろ？

障壁を乗り越えるのを嫌がる馬を無理矢理ひっぱって、あちこちで封鎖されている道を迂回して、ここまでに来るのにだいぶ余計な時間をくってしまった。

町中をぐるぐる巡っているうちにドラゴンが墜落して、ようやくたどり着いた時には兵士達に囲まれてしまっていた。

ああ、これはもう完全に遅れてしまった、と思ったのだが。

——なんで、逃げてんの？

信じがたい光景だった。ドラゴンが立ち上がったとたん、兵士達が群衆に混じって、我先にと逃げてくるのだった。

いったい何が起こったのか分からなかった。ドラゴンが怖いならそのまま大勢で囲んでいればいいものを。

「そいでよ、そいでよ！ 自分から壁にぶつかっていったんだ！」

どかーんって、ほら、あそこにドラゴンが……！　ドラゴンが……」

びしり、と通りの向こうを指さした大男は、ようやく今の不自然な状況に気づいたらしい、そのまま固まってしまった。

彼の指さす方向から兵士達が逃げてくる。

完全に統率を失って逃げ出す様は、傍目にはひどく不自然でさえあった。

その向こうでドラゴンは悠然と翼を広げ、青白い不思議なそよ風を身にまとい、ふわりと宙に浮かび上がった。

だが、その浮かび上がった先に、さらに高く浮かび上がっていた白馬の騎士がいた事を、この時だれも予想だにしなかった。

「……ああ、こりやまずい……」

そう言いかけたサージは息を呑んだ。

落下してくる騎士とドラゴンが接触した瞬間、三日月形の閃光が放たれた。

ドラゴンは片方の翼を切断され、白馬の騎士と共に地面に落下していったのだった。

あまりの出来事にサージは声が出せなかった。

口をあんぐりと開けて、ぶんぶんと首を振った。

——いや、できる。俺にもぎりぎりできる。

白馬は強靱な四肢を使って地面に着地し、すぐ側に墜落したドラゴンにぐるりと向き直った。

ひっくり返っていたドラゴンは獣のように素早く身を起こすと、数十頭の猛獣が同時に吠えるようなとてつもない咆吼を浴びせた。

騎士の灰色の目はじつに冷ややかだった。人の身長ほどもある爪を持つドラゴンに真正面から立ち向かい、腕の長さほどしかない銀の剣を向けて微動だにしなかった。

恐怖に震えていた兵士達は次々と立ち止まり、ドラゴンと対峙する騎士を振り返った。

群衆は目の前で起こった光景が信じられず、ただ目を丸くしていた。

彼らはその英雄の目の下にある船の傷を強く記憶に焼き付けた。それは長年にわたって俗話の中の勇者の特徴と混同されることになる。

「なん……だ、何が起こった……!？」

「今のは……なんだ！ 一体どうしてドラゴンが落ちた……!」

「馬鹿な……あんな短い、ただのショート・ソードではないか！」

「あの馬は何だ、あんな高さから落ちたのに……! 落ちたんだよな!？ えっ、まさか、跳んだんじゃないだろ!？」

「誰だ！ あの騎士は誰だ!？」

「ヘゲニ公の騎士ではなかったのか!？」

「誰も知らんのか！ じゃあ誰なんだ!」

「……勇者だ」

兵士達の目に、消えかかっていた闘志が次々と灯り始めた。全員が立ち止まり、もはや逃げている者は一人もいなくなっていた。

それどころか、一人、また一人と前へ歩き始めた。

「勇者、そうだ、勇者しかない!」

「勇者ひとりに任せていては、イーサファルトの名折れだ!」

「我々にはドラゴン・ライダーの加護がついている！」

大勢の兵士達が、大挙してドラゴンの元へ舞い戻っていった。

大男は同じ方向に指をさしたまま、ぐりんと振り返った。さっきの十倍くらいはしゃぎながら知らない男に自慢していた。

「俺の友達なんだぜえー！」

ドラゴンはこの騎士を未知数の脅威と捉えたようだ。片方の翼を切った目の前の騎士から後ずさった。

口の端からちりちりと青い炎を吹き上げていたが、どうやらまだゲームのルールを堅く守っているようだ。

いずれにしろ、このままでは再び大勢に囲まれてしまう。

追い詰められたドラゴンは両翼を広げると、青白い旋風を身にまとって、空高く跳躍した。

「馬鹿な、片方の翼だけで飛んだぞ！」

「なんだとっ……！」

だが、体長ほど大きさがある片翼を失って、まともに飛ぶのは容易ではない。

ドラゴンは大きな放物線を描き、隣の建築物の向こうへ姿を消した。尻尾でへし折られた鐘楼が落ちてきた。

「ゲールハーツ様！」

「申し訳ございません、前勇者の配下たる我々が、ゲールハーツ様を置いて敵前逃亡など……！」

ヘグニ公の側近は、地面にひれ伏す勢いで叫んだ。

だが、ゲールハーツはまるで聞いていない。
剣を高く掲げると、通りにいるすべての者に聞こえるように振り返った。

「戦いはまだ終わってはいない！　いくぞっ！」

一連の出来事を馬上で傍観していたサージは、ようやく我に返った。

「……うおっ！　やべえ、このままじゃ本気で奪われちゃう！」

彼は通りの向こうへと消えてゆく兵士達を全力で追っていった。

ドラゴンは建物を三つ飛び越えた先に墜落していた。

袋小路の奥でうなり声を上げ、壁のように並んでいる兵士達を威嚇している。

先頭のゲールハーツを始め、兵士達は武器を長槍に代えていた。どうやら巨大なドラゴンに対して、中距離戦を仕掛けるつもりのようにだ。

いや、同時に遠隔攻撃もするらしい。

よく見ると左右の建物の中を、兵士達が慌ただしく走っていた。恐らく、窓から弓矢や魔法で狙い撃ちにするのだろう。サージはそう踏んだ。

だが、そのとき魔術師部隊が対ドラゴン戦用に用意していた物は、サージの予想を裏切る物だった。

（ありゃなんだったんだ）

（タールです）

（やっぱりタールか）

（ええ、爆薬も混ぜてありました）

「ああああああ……なんてことを！ 一枚四〇〇〇シリルだぞ
おおおっ！」

ドラゴンの美しい鱗が、瞬く間にタールくさい液体に染まってゆき、サージは叫び声をあげた。

ゲールハーツは意気揚々と剣を振り上げ、長槍を抱えていた兵士達からひととき大きな歓声があがった。

タールの熱ではあまりダメージを与えられなかったらしい、目をしばたかせていたドラゴンは、すぐに戦意を取り戻して攻撃態勢に入った。

二本足で立ち上がり、ごうごうという音を立てて息を吸い込んだ……が、噴かない。

二本の前足を地面に突き、四つん這いに戻った。

どうやら向こうの狙いを読んだらしい、いま火を噴けば、ドラゴンの方が火だるまになってしまう。ダメージは侮れないし、さらに炎で視界が奪われる。

追い詰められていてもドラゴンは実に慎重だった。かわりに飛びかかってくる兵士達に咆吼を浴びせた。

「くそっ……！」

ドラゴンと兵士達の戦闘が始まるやいなや、サージは腰から短いダガーを抜くと、それを投げつけた。

ダガーが白馬の足下に突き刺さり、ゲールハーツははっとそちらに目を向けた。

「止める！ 止める止める、おい、おたくら一体何を考えてる！」

ゲールハーツは見知らぬ男にとつぜん水を浴びせられたようにたじろいでいた。

「なにをする！」

「こっちの台詞だ！ あれが何だか分かってるのか、ドラゴンだぜ！ それを大勢で寄ってたかって傷物にしゃがって……！」

「傷物だと、いったい何のことだ！」

「素材だよ、ドラゴンからは垂涎の素材が取れるってことぐらい知ってたんだろ！？ 手に入りたい素材があったら、適切な倒し方ってのがあんの！」

「なるほど……知っているぞ、素材集めは嫌と言っほど付き合わされたからな！」

「ああ、分かってねえ、お前ぜんぜん分かってねえ！」

「なんだと！？」

「お前ぐらの実力があつたら、ちよつと危険を冒せばそこその攻撃で倒せるだろうがよ！ それを部下にちまちま攻撃させやがって！ その態度が気に入らねえ！」

「くっ、冒険者ぶぜいが……！」

左右から側近が出てくるのを、ゲールハーツは慌てて呼び止めた。

「ゲールハーツさま！」

「待て、こいつにやらせてみよう！ そこまで大口を叩くからには、こいつは恐らくドラゴン退治の専門家に違いない、《ドラゴン・スレイヤー》だ！」

サージはにっと笑うと、背中に負った剣を振り抜きながら、馬の

背から降り立った。

ぞりぞりぞりっ、という不快な音と共に、錆付いた鞘から骨の色をした四角い剣が姿を現した。

ロングソード並みの刀身は、鰐元から切っ先まで均一の太さで出来ていて、四角い板のようだった。

剣先に意匠を凝らした鉤がついていて、禍々しい魔物が吠えている姿に見える。

「なっ……お、おい、その剣、その鎧！……ひょっとして、呪われていないか!?」

「シヨップには売ってないぜ、悪いが非売品だ。遠い遠い東の国の王様が、ドラゴン退治をした俺の栄光を褒め称え、お礼に王家が代々受け継いでいた武器と防具を俺に譲ってくれたのさ。でああああっ！」

兵士たちの間を縫って、サージが飛び出していった。

ドラゴンの攻撃目標が瞬時にそちらに切り替わった。

赤い鎧は敵の目をひきつける。

兵士達の長槍を尻尾でなぎ払い、サージに真正面から向かい合った。

サージは剣を槍のように構え、ドラゴンの弱点である、腹の下の一点をついた。

剣が接触した音とは思えない、大きな吊り鐘をついたような不気味な音が鳴り響いた。

とてつもない騒音に、兵士達は耳を塞いだ。

剣で突かれたドラゴンは、まったく傷つかない。だが、壮絶な悲鳴を上げた。

魔物の口に見える剣先の鉤が開き、鱗に食いついていた。そこにはドラゴンの心臓がある。

「あつ……あああああああつ！」

サージが力を込めて前進すると、体長六メートルはあるうかというドラゴンと共に、そのままずると前に進んでいった。

相手が軽ければ、一瞬で壁にたたきつけられただろっ怪力だ。

ドラゴンもただ押されているだけではなかった。地面にしがみついていた爪を振り上げ、攻撃に転じた。

サージはその瞬間を見切つて、ぐるりと振り返った。一瞬だけ剣を振り上げ、頭上から襲い来る爪を順にはじき返し、再びぐると向き直つて同じ箇所を突いた。

さらに不気味な鐘の音が鳴り響いた。先ほどよりもペースが速く、乱れている。ドラゴンの心臓の音だ。

「あああああああああああつ！」

両手を離れたドラゴンはやがてぶわりと宙に浮かび、仰向けに近い体勢になりながら、背後の壁にたたきつけられた。

鱗からは血がにじみ、体の内側に深くめり込んでいたが、それでも切れない。驚くほど切れない剣だ。

「信じられん……アーディナルにこんな男がいたのか！」

「《ブラッド・メイル血塗られた鎧》と《なまくら破滅の剣》だ！ まさかこいつ、剣豪サージッドノヴァンか！？」

やがてドラゴンの苦しそうな呻き声が、微妙に変調しはじめた。口元が規則的に動き、なにやら呪文のようなつぶやきに変わっていく。

鱗に付いていた傷はみるみるふさがってゆき、折れていた片方の翼が生え替わるように元に戻った。

そして完全に元に戻ると、姿がぶれるように歪み、その場にいた全員の視界から一瞬だけ消えた。

「あああああつ！？」

サージはそのまま突進して壁を突いた。壁に蜘蛛の巣状のひびが入り、崩落した。

彼の剣の先端は、宝石のような鱗を一枚啜えていた。

「……残念賞ってか？」

サージは上を見上げた。両翼を取り戻したドラゴンは、翼をはためかせて上空に逃げていった。

あの傷をつけるために命がけで攻撃をしてきた兵士達は、愕然とした。すべて回復してしまった。

あまりの出来事に、誰もが我を忘れて呆然としていた。疲弊しきって、眠るように長槍にもたれかかっている。

即座にドラゴンのあとを追いかける事ができたのは、ゲールハーツひとりだった。

ゲールハーツが中央広場にたどり着くと、地面のあちこちから火柱が立ち上っていた。

まだ群衆は完全に逃げ切っておらず、再び現れたドラゴンから逃げ惑う人々も大勢見受けられた。

だが、ドラゴンの目論見をつぶすことには成功した。

大多数は他の部隊が誘導して逃げられている。この町を全滅させる事はもうできない。

この勝負、こちらの勝ちだ。

——来い。

聖堂の真上で優雅に旋回すると、ドラゴンはまっすぐゲールハーツに向き直った。

まるで巨大な帆船だった。船首についている飾りのような目は、闘志にみなぎっていた。最初に彼が見た理知的な印象はもはやなかった。

——さあ、来い。久しく見ぬ強き人間よ。楽しいゲームをしよう。一騎打ちだ。

そのとき、彼にはドラゴンの声が聞こえた気がした。そんなはずはないと、ゲールハーツは幻聴を振り払うように首を振った。

ドラゴンが自分に一騎打ちを挑んでくる筈はない。だが、ドラゴンがまっすぐ自分に向かって来る以上、彼もドラゴンにまっすぐ立ち向かわなければならなかった。

——エーサ様。

ゲールハーツは剣を鞘に戻すと、長槍に武器を持ち替えた。帆船に槍一本で立ち向かうような、あまりにも無謀な体格比だった。

——どうか、私の分まで強くなって、いつの日か、真の勇者として立ち上がってください。

——あなたは人々をまだ見ぬ未来へと運ぶ、希望の船です。

——あなたは私の希望であり、私の運命であり、私の美しい妹で

した。

——どうか、これからの貴女の歩む道に、幸運のあらんことを。
(イーサファルト王立図書館貯蔵　ゲールハーツの手記　より抜粋)

先ほどサージが攻撃していた場所は、そこだけ鱗がはがれて血が流れていた。

血は赤かった。どうせなら緑や紫だったなら、怯むことなく突けただろうのに。

そう思うと、ふと笑えてきた。

どうやら血を見るのが恐い勇者に、彼も感化されてしまっていたらしい。

まっすぐ傷口に向けられていたゲールハーツの長槍が、びくりと震えた。

——エーサ様。

彼の前方には、鎧を身につけた女性の姿があった。

彼女は逃げ惑う群集の流れに逆らって、ドラゴンに向かってふらふらと歩いていった。

——嘘だ。やめろ、やめてくれ。

ドラゴンは彼女を腹で押しつぶすような勢いで下降してきた。

彼女は剣を抜くでも、身構えるでもなかった。ただ、ゆっくりとドラゴンに手をさしのべた。

——やめてくれ！

——あるべき事をあらしめる絶対原理の神、エカ神よ！　あつてはならない！

——こんな結末はあつてはならない！

そのとき、ドラゴンの表情が驚愕に歪んだ。

ゲールハーツにドラゴンの表情など読み取れるはずもなかったのだが、なぜか遠目にもドラゴンの動揺が伝わった。

ドラゴンは勇者の目の前で翼を広げると、魔法をつかったかのように、空中でぴたりと停止した。

——十ヶ月目にして、私にはようやく彼女の勇者としての資質が分かりつつあった。

——彼女は剣よりも魔法がうまく、時に魔物をてなづけてしまう事もあった。

——エーサ様は剣士よりも、おそらく《ビースト・テイマー獣使い》に近い能力を持っていた。

（イーサファルト王立図書館貯蔵　ゲールハーツの手記　より抜粋）

何が起こったのか、すぐには理解できなかった。ただ、武人として絶好の機会が訪れた事だけは直感で理解できた。

ゲールハーツはそのまま白馬を加速させ、ドラゴンの前からエーサをさらうように抱き上げると、ほとんど仰向けの状態になって腹の下にもぐりこみ、ドラゴンの傷口に長槍を突き刺し、うなる尻尾の下をくぐりぬけていった。

「……きゃああっ！」

大量に血があふれて、エーサが悲鳴をあげた。落とすまいとゲールハーツが力をこめると、腕の中で熱い体が逃げるようにもがいていた。

ドラゴンはゆっくりと上体を傾けると、石畳の上に墜落した。長

い尻尾が波打ち、翼が布きれのようにぱたりと被さった。

「エーサ様！ ご無事で……」

彼女の顔を確認しようとしたが、エーサはゲールハーツの腕を振り払って、脇目もふらずに駆けだした。

後を追って捕まえようとしたが、その前に彼の馬が力尽きた。

ゲールハーツが慌てて飛び降りると、白馬はそれを確認するように、その場に倒れた。

よく見ると、彼の馬は蹄が割れていた。ドラゴンと白馬の間に、真つ赤な蹄の痕が点々と続いていた。

その蹄の痕をたどるように、エーサはドラゴンに向かって走っていった。

——彼女はドラゴンの側に座り込んで、顔を覆って泣いていた。

——まるで町を焼き払ったドラゴンと、自分の好きな馬の区別がつかないようだった。

——私には彼女の気持ちはとうてい理解できなかった。

——私はどちらが死んでも泣けない。

（イーサファルト王立図書館貯蔵 ゲールハーツの手記 より抜粋）

ゲールハーツの後に、ようやく追いついてきた者がいた。赤い鎧を着た剣士だ。

「なんて名前だ？」

彼は息をしなくなった白馬を見下ろしていた。

白馬の目を閉ざしてやりながら、ゲールハーツは立ち上がった。

「名は無い。良い馬だった」

彼はすでに動かなくなったドラゴンから勇者エーサを引き離すために、ゆっくりと歩いて行った。

「ちょっと待って、じゃあ、ゲールハーツはイーサファルトの王子だったっていうの？」

ふたたび天空城の一室。イーラが疑問をはさんだ。「そうですね」と、オルフェウスが軽く相づちを打った。

「いや、今ごろかよ。ていうか、お前あるときどこに行ってたんだ？ 気がついたら俺ひとりになってたじゃねえか」

「生理よ、決まってるじゃない。やだこいつ、こんな大勢の前でなに言わせる気？ 変態？」

「言いたくないなら無理に言わなきゃいいだろ！ てかお前の生理痛のタイミングなんて把握してねえよ！」

二人がいつもように喧嘩を始める脇で、アツカは自慢げに鼻を鳴らし、サーラが顔を押さえて恥ずかしそうに首をふっていた。

「ふがつはつは、俺は知ってたぜ」

「ええええ……どうしましょう……王子さま……だったんですね……まあ、どうしましょう……」

「ねえ、次の話に進みたいんだけど？」

ミュンは自分が話し出すタイミングを待っていた。サージの銀髪をむんずと掴んで黙らせたイーラが、首をかしげた。

「だから、ちょっと待ちなさい。イーサファルトの王子って、たしか生まれてすぐ病気で死んだんじゃないかった？」

ふたたび視線がオルフェウスの所に集まった。

どうやら腑に落ちたらしいオルフェウスは、うん、と頷いた。

「ええ、確かに。二十九代国王には血の繋がった息子と娘がいましたが、どちらも王族に特有の病気にかかっていて、王子の方は生まれてすぐに死にました」

「という事は……養子なの？」

「はい、国王の弟のフィリップ・デル・バレイ氏が東の国を旅している途中、ぐうぜん遠縁にあたる彼を見つけて、養子にしたそうです」

「あの、フィリップ王子が？」

サージは顔をゆがめた。

「酒癖が悪くて女なら見境無く手を出して、おまけに放浪癖のある変人だつて聞いているぜ……」

「なるほど、それで曲がりなりにもゲールハーツ王子なわけね。それが、なんで公爵付きの騎士なんかになってるの？ アルト公爵は親戚になるわけでしょ？」

「さあ、そこまでは……」

オルフェウスが首をかした。

ミュンはぴこん、と耳をふって、ここぞ、とばかりに会話に割って入った。

「かいつまんで言い表すと、ゲールハーツはアルト公爵家の騎士に

なることで政權放棄の意思を表明し、親族間の争いを鎮静化したのです（えへん）」

「かいつまんで言い表しすぎだし……」

胸を張っていたミュンは渋い顔になった。

どうやらこれは彼らの想像以上に複雑な話になるらしい。

「つまり、昔からバレイ家は現国王の兄派と弟派の派閥に別れて争っていたのです。二人は腹違いの兄弟でしたから、どちらが王に着くかで王族の勢力図が大きく塗り替えられてしまうのですね。

結局は現国王が政權を手に入れたわけですが、同じ親族の間で血なまぐさい争いが起こっていました。フィリップ氏はとても聡明な人でしたから、道化を演じることで兄を立て、その争いを沈静化しようとしていたのです」

「えっ、そうなんだ……」

「そうなんです。ですが、フィリップ氏が養子を迎えてきてしまったことで、一度は治まったこの争いが再燃することになったのです。現国王の娘にあたるエリオル王女と、弟の養子にあたるゲールハーツ王子のどちらが次期国王になるか、という争いはじめたのです」

弟派はイーサファルトの伝統的な男性優位主義を持ち出し、王子を国王に迎えるべきだと主張した。

建前はどうでもいい、ともかく、弟派にとっては兄派に反撃する機会がふってわいて来たのだ。

「前回の魔界との戦争で、このエリオル王女が魔王ミュシャに誘拐されたとき、弟派がそれを救出するふりをして彼女の暗殺を企んでいました。その計画が明るみに出してしまったせいで、誘拐事件が解決した後、この争いは歯止めが利かない状態になってしまいまし

た。

そこでフィリップ氏はゲールハーツ王子を兄派の筆頭であるアルト公爵家の騎士にすることで、王族全員に政権放棄の意思を表明し、この争いを鎮静化したのです。

同じ兄派にヘグニ公爵がいて、彼はこの戦争で活躍したから、この時の赤い星の勇者と呼ばれるようになりました。そういうことです」

えへん、と胸を張っているミュンを、全員が穴が開くくらい見つめていた。

おずおずとサージが手をあげた。

「あの……ちょっと……ミュン……さん？」

「はい、なんでしょう。分かった、サーラの真似ですか？」

「ちがう。ええと、今、なんて言った？ 『前回の魔界との戦争』つてくだりから、俺たちには理解できない変な単語が、次々と……エリオル王女と魔王ミュシャが、どうしたって？」

ミュンは、むーんと、首をかしげた。ありのままを伝える作業だったはずが、彼女が思ったよりも難航しているようだ。

「前回の戦争が終わるきっかけを作ったのは、この誘拐事件です。魔王ミュシャがエリオル王女を誘拐し、逆にそれが原因で彼は侵略に失敗したのです。彼はその失敗で責任能力を問われて、後に失脚することになります。このエリオル王女というのがゲールハーツ王子の義理の姉にあたる人物で、現在ただひとり、現国王の血を引く次期国王候補です」

そこまで言い切ると、彼女はふん、と息をついて、仲間達に向き直った。

「いつまで、ちゃんと話について来てますか？」

王国イーサファルト

「お前はいつも泣いてばかりいるな」

ミュシャは窓に寄りかかって葉巻を吸っていた。
窓の外には雨にけぶる森が広がっている。

「泣いては、いけないのでありますか？　それが、勇者のつとめなのでありますか？」

エーサはお化けネズミをぬいぐるみのように抱きかかえていた。

「だったら、ミュシャさま、もう、勇者を止めたいのであります」

ミュシャは葉巻を窓から捨てると、机の上の巻いてあった新しい葉巻を取った。

いつも吸っているものと癖の違う葉巻だったが、いまはこれで寂しさを紛らわせるしかない。

「戦争の事を知っているか？」

「多少は知っております……けど、いまは何か話してほしいのであります」

ミュシャの親指が明るく光り、じじつと音を立てて葉巻は燃えた。

「リノフは《金の山》を表すアンドラハルの古い言葉だ。その名の通り、希少な金属や魔石が大量に出土する土地柄だ。

食糧の自給率はほとんどゼロに等しかったが、山のどこからも出土する豊富な金属と魔石はリノフに多大な富をもたらした。それら

はやがて鉱山資源が枯渇してきたときに、隣の国の領土を奪う武器を作るのにも大いに役だった。

アンドラハル半島にはリノフを中心にして世界に類を見ない魔法文明が発達し、気がつけばいくつもの属国を従える大帝國に化けていた。二十年前にはとうとう侵略できる土地がアンドラハルにはなくなっていた。

今はまだ潤沢な鉱山資源があるが、それらは百年以内にはすべて枯渇するという予測が出されていた。そこで新たな鉱山を手に入れる計画が持ち上がった。

いちばん現実的だった案が、人界だ。アンドラハルの魔族は日の射す環境では弱体化してしまうので、今まで人界の鉱山は手つかずのまま取り残されていた。

そこで考案された手っ取り早い方法が、人間の国を支配し、人間に鉱山の管理や運営をすべて任せ、その見返りとして発掘資源をアンドラハルに輸出させる方法だった。

そして、それを先王に提唱したのが《ゼブル將軍》という、先王の右腕と言われた男だった……」

その名前を出したとき、ミュシャは嫌な思いをしたように眉をしかめた。

人界への侵略に一番熱を注いでいたのもゼブル將軍だ、自分を恨んで当然かもしれない。

「侵略戦争は十年以上続いた。リノフが奪った国もあれば、途中で奪い返された国もあった。

だが、一度も落とせない大国があった。しかもそれは魔界のすぐ隣にある国だった。

侵略戦争に出かけた先王は、リノフの魔法技術を結集させた最強の鎧を身にまとったまま、ある日亡骸になって戻ってきた。

そのとき魔界に起きた混乱は意外にも小さかった、そんな日のために俺が用意されていたからだ。俺は生まれながらにして王となるべく育てられてきた。王座は当然のように俺に回ってきて、そのとき初めて俺は魔王になった。

戦争の経験が少ない俺は敵の様子をじゅうぶんに観察してから行動に移った。そのころイーサファルトでは後継者あらそいが大きな問題になっていた。

そこで俺がイーサファルトを攻略する際に指揮した作戦は、次期国王候補のエマリア王女を誘拐する事だった。

魔族の仕業だと分らないように工作し、適当な身の代の要求を突きつけた。

それが国内に一体どんな混乱をもたらすかは想像に難くなかった。案の定、国内は二つの派閥に分かれて争いをはじめた。あるいは王女はいなくなったものと見なして、強引に政権移譲を押し進めようとした、あるいは相手方の陰謀だと決めつけた、争いが争いを呼んだ。

端から見ている分には滑稽でさえあった、誰もが私利私欲に走って、とてつもない強国が勝手に自滅していくんだ。――だが、うまくいったのはそこまでだった。

誘拐犯の潜伏していた塔に、イーサファルトから精鋭部隊が送り込まれた。それだけじゃなかった、そいつらに危うく王女を殺されかけた」

エーサは小さく息を呑んだ。危険な雰囲気を感じたのか、お化けネズミが彼女の手のにおいをふんふん嗅いでいた。

「使い魔から報告を受けたときは、何を言っているのか理解できなかった。俺にとってはまさに寝耳に水の事態だった。経験の少ない

俺はうかつに動かず、とにかく現状維持に努めた。

その精鋭部隊が一体何者なのか、誰の差し金か、まったく判明しないまま、今度は俺たちがそいつらから王女を守らなければならなかった。思えば俺たちの方が滑稽だったな。

たった四人の精鋭に名のある魔族の戦士が何人もなぎ倒された。場所は人界で弱体化していた上、精鋭は相当な手練れだった。最後は魔王の俺まで出張る始末だった。

だが、そのせいで、けっきょく魔族の仕業だという事がイーサフアルト側に知れ渡ってしまった。そこで俺の計画はすべて水の泡になった。

そのとき王女は泣いていたと思うか？ 笑っていた。命を狙われているのは自分なのに、まるで勝ち誇ったような顔をしてやがった。

王は身の代の要求を受けなかった、それどころか、かわりにお前の命を狙う暗殺者が送られてきた、誰もお前の生還を望んでなどいない。

なのに、なぜ笑っていられるのか。何がおかしいか。そう聞いたら、こう抜かしやがった。

『あなたも王なら、強い敵に立ち向かう兵士を見たことがあるでしょう。』

どれほど恐ろしくても剣を取ることが兵士の戦いだからです。

ならば、どれほど恐ろしくても微笑みを絶やさぬことが王女の戦いです。

親子の情を捨てても勝利し続ける事が王にできる戦いならば、私は父や兵士、すべての民と共に戦っているのです。

私は王女である事を誇りに思っています、私がこうして微笑み続ける限り、イーサフアルトは勝利し続けるからです』

俺は人間を侮っていた。少なくとも、あいつだけは尊敬に値する人物だと思った」

「それは……つまり、好きになった、という意味でありますか？」

ミュシャを見ると、エーサは口をぽかんと開けていた。

お化けネズミがエーサの腕から身を乗り出して、ぢゅー、と鳴きながら飛び降り、床の上でべしゃっつつぶれた。

「ああ、今も愛している」

三本目の葉巻を手にとって、ミュシャは再び窓の外を見やった。

「それから一ヶ月ほど膠着状態が続いて、精鋭部隊の正体がわかった。後継者あらそいをしていた貴族の一部グループが王女の暗殺をはかったんだそうだ。

俺は一度崩れた体勢を整えるため、誘拐事件の幕を引くことに決めた。身の代も受け取って、双方痛み分けという事でリノフの議会も納得させた。

王が身の代の要求を呑んだ事を告げると、王女はそのとき初めて泣いた。

それからだな。それからは、何もかもが上手く行かなくなった。侵略はことごとく失敗して、もともと奪っていた鉾山はあっさり取り戻された。気がついたら戦争は人界の勝利に終わっていて、俺は王座を追われていた。

一番の原因は、たぶん俺に戦争の意欲がなくなったせいだろう。クーデターが起こって、当然だろうな。俺は城を捨てて、命からがら人界まで逃げてきた。そのネズミさながらにな。そうだな、そんな時に偶然、お前が俺を拾ったんだっただか……おい、だから、どうしてそうお前は泣いてばかりなんだ？」

地面に這いつくばったお化けネズミを抱き寄せて、エーサはその背中で顔をぐしぐし拭いた。

「し、失礼つかまつった……わたくひも、昔の事を、思い出したのであります。わたくひ、元いた世界では、《サチ》という名で呼ばれておりました……」

「ああ」

ミュシャは頷いた。

「知っている」

「さすが、ミュシャさま、なんでも、お見通しでござりまするか。ああ、嬉しい。わたくし、そこでも、ミュシャさまに、よく似たお方、を、お慕いしておりました……しかし、身の程しらずの、恋であること、いま、よく分かりました……申し訳、ごさいませぬ、わたくし、いつも泣いて、ばかりで……本当は、ミュシャさまの、前では、笑いたかったのに、でも、泣いて……泣いて、ばかりで、ごめんなさい」

お化けネズミで顔を隠したまま、エーサはミュシャの前から逃げていった。

ミュシャは三本目の葉巻に火をつけて、ずっと窓の外を眺めていた。隣の部屋からエーサの慟哭が聞こえてきて、彼は深くため息をついた。

異世界の少女サチ

行方不明になった勇者を探すため、ゲールハーツはハイネの町を後にした。

馬のない今、ホルト高地に広がる草原を歩いて渡っている。

彼はあえてゆっくり時間をかけながら歩いていた。

彼女の行く先はもうだいたい見当がついているし、雨もさほど強くはなかった。

たびたび城から逃げ出したくなるエーサの気持ちを、ゲールハーツは理解できないわけではなかった。

昔は彼も同じ気持ちを感じていた。彼もまた己の運命に翻弄され、争いに巻き込まれた身だった。

——今日からお前は俺の息子だ。

彼の脳裏に父親の声が蘇った。

酒臭い息に、赤ら顔、ぼさぼさの髪や汗臭い服は何日もほったらかしにされていた。

——わかるか？　つまりは俺がお前のダディだ、パパだ、お父上だ、お父様つてのも悪くはないな。どれでも構わんど。

——フィリップさん。お願いだからちゃんと服を着てよ。

——さっそく反抗期つてやつか。ははん、悪いが俺も反抗する。いつたい俺が何年反抗期をやつてると思ってるんだ？

風呂上がりのフィリップ王子は、肩にタオルを一枚かけただけの

あられもない姿でアルコールをあおる癖があった。

全身をほてらせ、ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、と喉を鳴らすたびに、腰が右、左、右、と無意味に振られた。

——フィリップ、聞きたいことがあるんだけど。

——おやおや、さっそく敬称がなくなったか。俺にはお前の未来が読めるようだぞ、そのうちダメ親父とかお前とか呼ぶようになる。

——どうして僕なの？

——さあな……お前は魂が惹かれあうってのを信じるか？

——あえて言うなら、目だ。お前は王座に就く者の目をしている。

——いつかイーサファルトに帰ったら、お前のその半分閉じかけた目をもう一度ひらかせてやんよ。

——向こうにはお前の従姉になる女の子がいるが、お前とよく似た目をしている。

喜べ、とてつもない美人だ。そう囁きながら、床の上のアルコールを側転しながら取りあげた。

さらに瓶の蓋をこじ開けながらバク宙、瓶の中身を飲みながら側宙、さまざまな華麗な動きをしてさまざまな汚いものを見せつけながら、そのままベッドに横たわった。

——普通にベッドに入れないの？

——俺みたいなグレートな王子様は妥協しないの。

四秒ほど続く大きなげっぷをして、フィリップ王子はごろんと横になった。耳をぴくぴくと動かしただけ。

ゲールハーツは彼のことをカバ王子と呼ぶことにした。

——家族が死んで、相続問題に巻き込まれて、周囲にいるのは腹黒い連中ばかりだ……お前は孤児院でそういう立場を経験したことはないか？

——……。

——自分も弟と同じ病で明日死ぬかもしれないのに、外面はいつも気丈に振る舞っている。父親は彼女に手を貸さない、二人ともそういう立場だったのをわきまえている。

——そういう親子がいるんだ。だからゲールハーツ、お前の助けが必要なんだ。王家が抱えている問題を解決できるのは、一族の血のしがらみを持たないお前しかない。

——よく、分からないよ。

——いまは分からなくていい。いずれ大きくなったときに、分かる日が来る。いつかお前が、俺みたいなグレートな王子様になったときに。

魔法使いは玄関で煙を噴いていた。彼と会うのはこれで二回目だった。

葉巻は魔界原産の植物を使った嗜好品だ、当時まだイーサファルトにはなく、ゲールハーツはあの煙を吹くものを不思議な道具か何かのように見ていた。

「彼女が来なかったか」

思い切って呼びかけると、魔法使いは屋敷の上の方を葉巻の火で

示した。

「二階の奥だ」

ゲールハーツは切り立った切妻を見上げた。

そのまま玄関を上がり、魔法使いの横を過ぎ去ろうとしたゲールハーツは、もう一度ぴたりと足を止めた。

「……この事は、他言無用だ。私のためにも、お前のためにも」

「あの娘の為にも、か？」

「そうだ」

魔法使いはにやりと笑った。

女と間違えるような美しい顔に似合わず、しゃがれた低い声だった。

「魔法使い、ずいぶん彼女が世話になったようだ。遅れたが、礼を言わせてもらう」

「……クエストのことか？ 俺はただ素材を手に入れたかっただけだ」

「それだけではない……それだけではないのだ、魔法使い。お前は、あの娘の事をどう思う？」

ミュシャは眉をひそめた。

「わがままで、マゾで、泣き虫な勇者だ。たまに魔物を飼いたがる。それがどうした？」

「本当に、勇者になれる器だと思うか？」

「何を今更……例えそうでなくとも、お前が彼女を勇者に相応しい人物に仕立て上げなければならぬだろう？」

「ああ……」

ゲールハーツは眉根を下げた。

「そうだったな」

まったく、骨の折れるお役目を請け負ってしまったものだ。

どうして自分がこの役目を与えられたのか、ゲールハーツはよく分らない。

あの争いから退いて以降、政略的な思惑のところにはすっかり疎くなっていた。

ただ、ヘグニ公爵はあえて「お前でなければならぬ」と言つて彼を雇つた。

ゲールハーツも兄派の有力者であるヘグニ公爵の頼みとあれば、断る訳にはいかなかったのである。

「ところで、どうしてお前が騎士なんかをやっているんだ？ ゲールハーツ」

ゲールハーツは振り返つて、もう一度魔法使いの姿を見た。

不思議な色あいの目だった。まなざしの強さは、ドラゴンにも似ている気がする。

彼と直接の面識があるのは、たった一度しかないはずだ。

だが……もうすでに何度も。人生の中で、彼はこの男ともう何度も邂逅しているような気がした。

「お前は どうして魔法使いなんかをやっているんだ？ ミュシャ」
「答える義理は無いな」

「そついう事だ」

ゲールハーツがエーサを連れて出てくると、魔法使いはまだ玄関先で煙を吹いていた。

彼女はずっと無言だったが、帰り際、屋敷の方に向かって深々とお辞儀をしていた。

そしてネズミを抱いたまま、何も言わずにゲールハーツについてきた。

城にネズミを抱えたまま連れて帰ることはできないだろうが、取り上げるのは忍びなかったのでそのままにしておいた。

後でネズミだけでも返しにこなければ、と彼は思った。

「……おかしい、かれこれ三ヶ月も経つのだが」

ミュシャは太ったネズミを抱きあげて、つぶらな丸い目とにらみ合っていた。

コツシュート一族のレジスタンス、ヤロミールから最後の連絡があつて、ずいぶん音沙汰が無い。

魔界の情勢や、新しい魔法薬に関する情報など、聞きたいことは山ほどあったのだが。

「ネズミ、お前はまだ何も連絡を受けてないのか？」

尋ねられても、栗色の目をしたネズミは首をかしげるばかりである。

ただの太ったネズミである。あの時のように、ネズミの目が紫色に光る気配すらない。

迎えが来るまでのあいだ、ミュシャの方も準備を着々と推し進めていた。

戦いに備え、様々な魔法薬の調合に挑戦していたのである。

エーサはゲールハーツが城に連れ帰って以降、屋敷に姿を現さなくなった。

お互いにもう会う事を禁止された身だったので、別に疑問は無かった。これからは薬の材料は自力で調達するしかなかった。

幸いにも軍資金を手に入れていたミュシャは、それを元手に数種類の魔法薬を作る事が出来た。

回復薬に、解毒薬、攻撃用の危険な魔法薬、能力を一時的に強化する強化薬、回復薬と解毒薬の効果をあわせ持つ万能薬も作った。

市場の商人に販売委託をもちかけたのだが、どんなに良い条件を出したところで、怪しげな魔法使いから仕入れた薬を売りたいがる商人はそうそういなかった。

……薬草パンでも作って、パンにして売ってみるか。

……あるいはクッキーも良いかもしれない。

いずれにしても、魔王の名が泣きそうだった。

何かアイディアはないものか。あれこれ考えを巡らせながら町をぶらぶらしていると、中央広場の掲示板に、ひときわ大きな張り紙が出されていた。

城の広報のようだ。領民のほとんどは字を読めないので、絵でも内容が分かるように描いてあった。

そこには町を襲う巨大なドラゴンと、剣を持った男の肖像が簡潔に描かれている。

驚くべきはその内容である。ミュシャはおもわず目を見張った。

——先日、魔界より現れた暴竜テンペスト・ミルを神聖な魔力で退治した勇者イーサは、このたびヘグ二公爵様ご一行と共にイーサファルトに向かい、国王との謁見を無事に果たされた！

——勇者イーサはそこで国王陛下から直々にお声を賜り、《魔王討伐軍》結成の任を与えられ、魔族を征伐する決意をいよいよ固められたご様子である！

——我こそは、と思う勇士よ！ いまこそ憎き魔王と戦うときである！ 勇者の元に集い、《魔王討伐軍》へ参加するのだ！ 参加者、絶賛募集中！ GO！ 城へGO！

《イーサファルト王国魔王討伐軍・広報部》

人界の文字だから読み違えたのかと思ったミュシャは、その文章を何度も読み直した。

どうやら、あのわがままで、マゾで、泣き虫な勇者が、町を覆う巨大な竜を退治し、軍を結成していよいよ魔界へ侵攻するというのである。

《テンペスト・ミル》という言葉はミュシャには聞き慣れなかったが、角が五本ある挿絵の特徴から、その正体が判明した。

「ヤロミール……」

彼は掲示板にくつつきそうなほど顔を近づけ、呟いた。

道理で勇者ごっこをする子ども達が、棒きれを振り回して遊んでいたはずである。

町はいつの間にか伝説の勇者に対する期待でふくらみ、人々の顔は輝きを増していた。

ミュシャの心休まる場所はどこにもなかった。どこへ行けども伝説の勇者の話で持ちきりだった。

「なあ、魔法使い、あの薬、もう一度売る気はないか？ 戦争がはじまるってんで、物資が不足しているんだよ」

市場に行くと、委託販売を持ちかけた事のある商人が、彼にせがむようになった。

さらにミュシャに追い討ちをかけるような噂が流れ始めた。

「エマリア王女がアルト公爵家の息子と結婚するらしい」

という話である。この世には神も仏もなかった。

その日、ミュシャは何も手がつかなくなり、酔いつぶれるまで酒場を回った。

ふらふらになりながら屋敷に戻って、目が覚めたら薬の調合も投げっぱなしのまま、酒場へと向かった。

ある朝エーサが様子を見にやって来なかったら、彼はそのまま不毛な日々を送り続けていたに違いなかった。

「ミュシャさまあゝっ！ これは一体、なにごとでござりまするかあゝっ！」

玄関で倒れたまま眠っていたミュシャを発見して、彼女は仰天した。

「もうだめだ……私はもうだめだ、光が、光の勇者がやってくる……赤い星の伝説は本当だった、このままではいずれアンドラハルの闇は払われ、アーディナルの竜は滅んでしまう……！」

「何をおっしゃっているのござりまするか！ よく見てくだされ、ほら、わたくしが来たのでござりまする！ しっかり！」

慌ててミュシャを抱き起こし、肩を貸して歩き出した。

それでもミュシャはつわごとをぶつぶつと繰り返していた。

「ああ、ヤロミール、あいつは良い竜だった。どうしてあいつがこんな事に……！ サチ……お前だけは生きろ、この光の世界で勇者として生きろ……ヤロミールの後を追うことは無い……」

ミュシャはベッドに放り投げられ、仰向けになってエーサを見上げた。

「ミュシャさまっ！ しつかりしてくだされ、すぐに私がローションで……違った、ポーションで元気にしてあげます！」

「もう放っておいてくれ、エロ勇者。お前の貧相な体とポーションで回復できるほど、私の傷は浅くはないのだ……」

「ひ、貧相ですとっ！ そんな侮辱は敵方にも受けたことはないのであります！ だ、だ、だったら、ミュシャさまは黙って見ていればいいのであります！」

エーサは鎧を脱ぎ始めた。胴鎧を樽のように脱ぎ捨て、ガントレットの留め金を外し、脚甲のベルトを外そうとしたところで、バランスをくずしたエーサは、そのままミュシャの上に覆い被さった。

ミュシャはエーサの腕を掴み、引き寄せた。

「見ないうちに、ずいぶん遅しくなったな」

「ミュシャさまが、弱くなったのでござりまする」

「エマリア」

黒髪をなでられると、エーサは怯んだ。

「ひいっ！？」

「お前にも故郷を見せてやりたかったぞ、エマリア」

「ミュ、ミュシャさまっ！？ …… いけませぬ、いけませぬっ！

それがし興奮しちゃう！ …… はっ、こ、これはミュシャさまをモノにする、絶好のチャンス！？」

「暗くて蒸し暑いところだが、農民は魔石の光を使って稲作をしている。花や木を育てることが貴族のステイタスだ。葉巻を吸いながら、魔石を転がす遊びに興じて、ドラゴンに跨がって狩りをたしなむ。 …… たまに瘴気が薄れて日が射したりノフは、どの宝石よりも美しい」

「が、がんばって、勇者サチ、邪心を抱いちゃダメ！ ミュシャさま、その、たいへん申し上げにくいのですが、エマリア王女は……」

「エマリア、だがお前を連れてゆく事はできない、許してくれ、私は騎士でも盗賊でもない、私はお前をさらう事が目的で来たのではない、なぜなら、私は……」

「ミュシャさま、どうか、どうかお聞きくだされ、あの、エマリア王女は…… 魔族に…… さらわれて、しまったのであります」

エーサはミュシャの胸を押して、まじめな顔で言った。

「……それがしがイーサファルトについた頃には、もう…… 犯人は分かっております、それがしが王と謁見するとき、不意にあたりが薄暗くなったのであります…… 不気味な声が聞こえて、その声はアンドラハルが魔王ゼブルを名乗ったのであります……」

ミュシャは肩から力が抜けた。

王城で何が起こっていたのか、彼は知る由も無かった。

それ以前に、ゼブルの狙いが分からなかった。一体なにが狙いだ？

そんな事をしてゼブルに一体なんの益があるというのだ？
ただイーサファルトを挑発しているだけにしか思われなかった。
それともミュシャへのあてつけだろうか？

呆然とするミュシャを前に、イーサは決然と立ち上がった。

「……ご安心めされよ、ミュシャさま！」

背後にあるカーテンを開くと、強烈な朝日が射し込んできた。
ミュシャは吸血鬼のように、ぎゃあつと声をあげた。

「それがしが、護ってみせます！……エマリア王女も、この光の世界も……」

ミュシャは枕から顔を上げた。イーサの姿は逆光を浴びて影になっていた。

「ミュシャさま、ちかごろ妙に嬉しいのであります。朝、目が覚めると光にあふれているのが……馬の背中の中体温や、ブーツの金具のガチャガチャ、町の人々は異国の言語で話し合っている、そして薬を作っている貴方がいる。全てが愛おしいのであります……ミュシャさま、それがしはこの世界が好きであります……ここで見てくだされ、それがしが、絶対に護ってごらんにみせます！」

魔族シルトの末裔

天空城。ミュンに対して、オルフェウスが疑問を挟んだ。

「分からない。ゼブルという魔王の考えていることが、僕にはぜんぜん理解できない」

オルフェウスは難しそうな顔をして、地面にしきりに魔法陣を描いていた。

「本を燃やしたり、王女様を誘拐したと思ったら、王室に声だけ響かせて何もなかったり、やることなすこと、何か変な魔王だ。皆さんも、そう思いませんか？」

周りの仲間達もそれに首肯していた。

ミュンはその疑問に即座に答えた。

「王室で宣戦布告をしたのには、はっきりとした理由があります。新王ゼブルのスキヤンダル隠しの為です。竜族の長ヤロミールが単独で人界に攻め込んで、しかも殺されてしまうというのはゼブルの新政権にとって、かなり大きなスキヤンダルだったのです。」

このスキヤンダルで、新政権に対する魔界全体の評価が揺らぐ恐れがあったのです。長を失った竜族が分裂するなど、新政権の中で大きな混乱が生じてしまう事が考えられました。そこで新王ゼブルは彼らの信頼を勝ち取るために、イーサファルトに『形だけの宣戦布告』をして体面を取り繕ったのです」

「『形だけの宣戦布告』……？ 形だけ、つまり、戦争するつもりはなかったの？」

「ええ、ゼブルにイーサファルトと戦う必要は、まったくありません」

んでしたから」

ミュンはひとり首肯して、先を続けた。

「それを王女の誘拐という形にしたのも同様の理由からです。つまり、ミュシャが前回つかった手法を踏襲することによって、自分がミュシャ一族から繋がる正統な王であることを竜族にアピールする狙いがあつたからです。

……魔界のとある国では、そう考えられています。ゼブル自身の真意は定かではありませんが」
「なるほど、ようやく腑に落ちた」

オルフェウスはしきりに感心していた。彼にとっては、とても人ごととは思えない話だった。

サージが身を乗り出した。

「ちょっと待ってくれ、たしか、リノフが人界に戦争を始めたのは、『人界にある鉱山資源を奪うため』じゃなかったのか？ ミュシャはそう言ってたんだろ？ イーサファルトは有名な鉄の産地だし、魔王に支配された国をいくつも取り戻した強国じゃないか。戦う必要がなかったっていうのは、どうしてだ？」

「難しい質問ですね、最初からこの侵略戦争自体に意味がなかったというか、どの国とも戦う価値がなかった、と言いますか……」

ミュンはしばらく答えに詰まっていた。

どうやら彼女には、そのあたりの事情がよく分かっていない節があつた。

「ちょっと待て……ミュン、ひょっとして『見えなかった』のか？」
「えっ、あれだけ大きな口を叩いておいて、リノフ見えなかったの

「？」

「見えていました、ちゃんと」

見くびられたミュンは、頬を膨らませた。

「ですが……そこから先の話は、完全な推察になってしまいうのです。なにせ、文書で書かれたり、閣議で話し合われたりもしなかった。『百年以上昔に決まっていた事』になるので、私はまだ見ていないかっただのです」

一同は当惑した。

「なんだ、そりゃ……」

「ゼブルの出自であるシルト一族は『星読みの一族』です、星を見つめて、その運行で自分の行動を決める。……不思議なことに、彼らの文化は口伝もしなければ、文字でも伝えない。数百年おきに、血にその全てを書き記すといっています。特定の星の並びを見たときに、その予言が血の中から蘇るのだそうです。ゼブルの行動原理は、おそらく百年以上前に決定していたことなのです。私にも彼らの伝える文化を読み取ることができません」

「それは知らなかった……」

「ええ、ミュシャでさえ知りませんでした。ですから、ここからは私の力で得られる情報だけでは、語り尽くせない部分もでてくるかと思っていますが……」

仲間達は顔を見合わせた。アツカが率先して言った。

「分かる範囲で良さ。どうせ政治的な話とやらは、俺には理解できなかつたし。どこまで聞いたっけ？」

「エーサが勇者になる決意を固めた所まで話は進んだし、あとはミ

ユシャが魔王になったところだけだ。後は《魔王討伐軍》と部隊長の俺様の武勇伝さ」

「ねえ、なんか語る気なくなったから、かつ飛ばしてもかまわない？」

「あの……わたし、まだ出てこないん……ですけど……？」

サーラがおずおずと手をあげて、仲間達の注目を浴びた。

「あなたも語って欲しいの？」

「だって……わたしも、仲間……だし、よく、分からないのは、嫌です」

サーラはきゅつと口をつぐんでいる。

ミュンは片眉をつり上げた。

「そうね……あの事件を起こしたのは、ロッティ中尉という新政権の将校の一人だったわ」

魔族によって捕縛されたゴブリンたちは、村の中央のたき火にくべられてゆく『本』を丸い目でじつと見つめていた。

長年をかけて集積された本は、いくら燃やされてもつきることはなかった。

「あー、かつたるいー、かーつたるーいーっ！」

灰色の軍服を身にまとった兵士達の中に、年若い将校がいた。

階級は高いようだが、背丈は子どものように低い。彼の身の丈をさらに上回る長剣を抱えて、ポーシオンをあおっていた。米から作

られたポーシヨンで、多少アルコールが混じっている。飲むたびに、
ぷはぁ、と熱い息をはいた。

「ゼブルのバーカ！　せっかくクーデターで功労してあげたのに、
暴動をちまちま鎮圧して回る役なんて。ボク聞いてないよっ！」

長身の軍師がやってきた。手には羽根つきのペンを持ち、手元の
手記にすらすらと文字をしたためている。軍の活動を報告する書記
官だ。

「中尉、いつまで子供じみた事をおっしゃっておいでですか。魔王
様に聞かれては大事ですよ」

「ああ、あいつは魔王、ボクはいつまで経っても中尉のまんま、気
にくわない、気に入らないっ」

「そろそろ帰りたいので、仕事をさせてください」

「やれやれ、仕方ないか、それがお勤めだもん……おお、見る、
この村はアンドラハルの歴史に関わる『本』を所持していたぞっ！」

中尉は、その辺の兵士の手から適当な本をもぎ取って、空に掲げ
た。彼はタイトルも見ずにそれを火に投げ込んだ。

「これまで竜の一族が支配してきた、アンドラハル半島の、誤った
知識を伝える悪書である！　シルト一族に対する侮辱だ、この村に
反乱の意ありと見た、まさに六罪七禍に値する！　魔王に忠誠を誓
う軍団よ、ここにある全ての本を焼き尽くせ！　……ねえ、キミは
こんな辺鄙な村のゴブリンが、魔王に対して反旗を翻すとか本気で
思ってるの？」

「後半の愚痴は聞き流しましょう、ロツティ中尉。では、私はこれ
にて失礼させていただきます」

書記官は義務的にさらりと受け流し、新しい歴史を書き綴って帰って行った。

ふん、と鼻で息をついて、ロツティ中尉はその辺に群れていた大王カラスを蹴つ飛ばした。

ゴブリン達は首をすくめ、怯えるばかりだった。

「ああ、面白くない……ヤロミールが人界に遊びに行つてぶつ殺されてから、軍の規律はめちゃくちゃ厳しくなるし……このボクがおとなしく命令に従つて、ゴブリンの村襲つてるなんて考えられない……ふつう逆じゃね？ てか、ヤロミールめ、人界に一体何の用があつたんだ……？」

ロツティ中尉は北の空を見上げ、星読みをはじめた。

太陽という天体が苦手なだけで、彼ら魔族は小さな星々の運行に關しては人間よりも敏感だった。

もともとアンドラハルを包んでいる瘴気とは、竜族が本能的に生み出しているものである。竜族はそれによつて魔族が活動しやすい環境を周囲に生み出すのだ。ゆえに夜になると瘴気はほとんど薄れてしまい、今度は月光や星明かりが魔族の難敵になる。魔法使いにとって月の満ち欠けを読むのは必須であつた。

空に渦巻く瘴気の間隙から、赤い星がきらぎらと輝いてみえた。

出現から一年が経過し、さらに大きくなつて見える。

不規則に出現するこの赤い星は、太陽に並んで忌まわしい天体だった。

この星が空に出現するたびに国がひとつ滅びる、とさえ言われている。

人界で何かが起こっている。ロツティ中尉は星の動きをそう読み

取った。

彼は人知れずにやけた。なぜなら、ゼブルも彼と同じ運命を読み取っている筈だからだ。これはいい理由になる。

「……そうだ、そうだよ。何か起こってるにちがいない。確かめなきゃね。ボクも人界にまでちよつと遠征してみよつか。ちよつと遠くまで梵書をしに行つてこよう、それだけさ、与えられた任務の範疇だよ……くくく」

そして血の予言通り、ひとつの大国が今まさに滅亡への道をたどっていたのを、この時は誰一人知るよしもなかった。

ただ、彼らシルトの一族だけが、百年前に血に書かれた予言によってそれを予期していたのである。

予言者デーゼ

ミュシャは受注書を見ながら、倉庫に並ぶ壺とにらみ合っていた。

「石はだいたい今の在庫で足りるな……あとは薬草か……」

彼は今、薬師として大量の発注を受けており、大忙しだった。

魔王討伐軍が彼の作った回復薬を買い取るよう、エーサが取りはからってくれたのである。

ミュシャは大量の薬を作りながら、ため息をついた。

——俺は一体なにをやっているのだろう。

レジスタンスとのつながりも完全に断たれてしまった。ヤロミールがいなければ、ネズミはただのネズミでしかなかった。

同様に、落ちぶれた魔王はただの魔法使いでしかない。

むろん彼女にとっては善意のつもりだろう。作業に没頭することによって、ミュシャの精神状態も次第に安定してくるようになった。だが情けない事には変わりなかった。

酔った勢いでとんだ醜態を見せてしまった事も、いま思い出すだけで顔から火が出そうだ。

いくつかの壺を開けてみて、ミュシャは首をかしげた。

——やっぱり減っているな。

何度数えてみても、素材が少し減っているのである。

薬草だけならネズミがつまみ食いしたことも考えられる。だが、

魔石の方は考えにくい。

在庫管理をするようになってようやく分かってきたことだが、どうやら彼以外にもこの屋敷の素材を利用している者がいるらしいのである。

そのときだった。

がたん、と上の方で音がした。

倉庫の真上にあるのは、いつも薬を調合している部屋である。いつもならネズミの仕業だろうと見なしていたところだったが、そのときのミュシャは直感的に何者かの存在をかぎ取っていた。

魔力を高め、いつでも一言で魔法を発動できるように呪文を組んでおく。

慎重に階段を上がり、倉庫から顔を出してみた。

そこには間違いなく、何者かの気配があった。鍋の下には消したはずの火がついていた。室内は湯気で曇って、視界が悪かった。

魔法使いのローブに身を包んだ不審者が、鍋でぐつぐつと何かを煮ていた。

魔道書をぺらぺらとめくって、今まさに、まるまると太ったネズミを鍋に放り込もうとしているところだった。

「やめろ」

ネズミの尻尾をつまんだまま、魔法使いはゆっくりとミュシャのほうに顔を向けた。

ひび割れた丸めがねをかけ、齒のほとんど抜け落ちた口をぽっかり開いている。

「そいつを煮られたら、非常に困る」

「ほう、煮られたら泣く女の子でもいるのかね」

魔法使いは、にたり、と不気味に笑っていた。

「わしの屋敷だ、屋敷に落ちていたものをどう使おうが、わしの勝手じゃろ？」

「お前がこの屋敷の主か？」

「いかにも——しかし、お前さんは一体だれだね？ どこから来たかは、言わんでもいい、煙草のにおいがあるので大体分かる」

この魔法使いは間違いなく、魔界と人界の両方の知識を兼ね備えている。

ミュシャは、この魔法使いに一瞬すべてを打ち明けようか迷った。こいつなら何か知っているかもしれない。

——いや、何もかも知っていてもおかしくはない。

「毒を盛られた」

「ほう、毒を」

「新種の毒だ。食事に混ぜてあったらしい、ひとくち食べた瞬間に魔法が一切使えなくなった」

「今は回復しているのか？」

「ああ、多少なり魔力が戻ってきてはいるが……」

「だが、全盛期に比べると無いも同然というわけか」

「恐らく鉱物系の毒だ、効果が長すぎる」

「いや、分かんぞ。呪いがかけられているのかもしれない」

魔法使いは、かかか、と笑った。ミュシャは笑うどころではなかった。

「いま魔界で何が起こっているのか、知っているか」

「知らんはずはあるまい、知っているからこそ帰ってきたのだ。ここに来るまでに、いくつもの村が焼かれているのを見てきた。竜の守護する《竜の宮》^{アシドラハル}が、星読み一族の独裁政権になってからというもの、ひどい有様だ」

「ゼブルの目的は何だ？ シルト一族は何がしたい？」

「わしにそんな事を聞くのかね？ だが、怪しげな噂がある。村を焼かれた村人達は、みな軍によってどこかに連れて行かれているそう。《新天地》と呼ばれる怪しげな場所にな」

ミュシャにはまたしても聞き慣れない言葉だった。ヤロミールはそのような事を言っていなかったはずだ。

「《新天地》だと？」

「リノフのどこかにあるそう。新しい王は、そこに大量の物資をかき集めている。人も魔石も、あらゆる資材を。おかげで、魔界では魔石一個の値段がとてつもない金額にまで高騰していて、わたしにはとても手が出んのだ」

そう言っ、魔法使いは不意にどこかに歩き出した。

机の端を掴み、扉を掴み、よろよろと危なっかしい足取りで部屋を出て行く。

どうやって生きて魔界から戻ってこられたのか聞いてみたくなるほど弱々しい老人だった。

彼は二階に上がると、とある部屋の前で立ち止まった。

来るたびに嫌な気配のするドアだった。

よく見るとドアノブに刻まれている紋章が、魔法を発動する仕組みになっている。

前に誰かが進入を試みたことがあるのか、ドアノブは傷だらけだ

った。古いのから新しいのまである。

「この部屋にはもう入ったか？」

「そんな怪しい部屋に誰が入るか」

「賢い奴だ。いろんな侵入者がいたが、新しい鍵までつけたのはお前が初めてだ。よっぽど大事な客人がいたようじゃのお」

「御託はいいからさっさと入れ」

魔法使いはドアの鍵を開け、ゆるゆるとした動作で部屋に入ってしまった。

その瞬間、部屋から真っ黒い闇があふれ出してきて、屋敷全体が無音の闇に包まれた。

ミュシャの足下を薄い白煙が流れてゆき、空には赤い星が輝いていた。

どうやら罫が発動したらしい。不思議な空間にぽつんと置いてゆかれたような心地がした。

昔の忌まわしい記憶がありありとよみがえってきた。

彼は執務室にいた。王座から退いた彼は、諸侯の土地の配分を整理する職務に没頭していた。

ふと気がつくと、食事が机の脇に置いてあった。

カプリコーンの乳を使ったスープに、貴重な野菜の入ったパン、いつもの夜食である。

ちらりと顔を上げると、執務室のドアが閉じられようとしていた。近習がドアの隙間からこちらを見ていた。怯えるような目をしていた。

ドアが閉じられ、ミュシャは食事をじっとにらみつけた。毒の気配はない。毒に反応する銀の器も反応していない。

しばらくすると、馬の足音がした。塔の燃え落ちる音がした。剣と剣のぶつかり合う音がした。

彼は大いに悩んだ。

悩んで、悩んで、悩みぬいた。

暗殺されることぐらいはあるだろうと予測していた。だが、このような形になるとは思ってもみなかった。

食事を運んできた近習はドアの向こうで泣いていて、いつまでも去りそうな気配が無かった。

もしここで彼が食事を採らなかったら、あの近習は間違いなく殺されるだろう。

次第に軍靴の音が近づいてきた。ドアの外で近習の悲鳴が聞こえて、途絶えた。

彼は一口だけスープをすくい、天窓から外に出た。

戦争の幻が左右を流れていった、ミュシャは落ち着いて煙草に火を点した。

空の赤い星に向かって煙を吐きかけ、魔法が解けるのを待った。

魔法使いが台座に置かれていたドクロを取り上げると、幻は一気に消えた。

「いやな罨を仕掛けてくれるな」

背中がじつとりと汗ばんでいた。

「ファイア」という魔法だ、記憶の中から恐怖の対象がランダムで浮

かび上がる」

魔法使いはドクロを台座の上に置いた。室内はいかにも魔法使いらしい、悪趣味な装飾品でゴった返していた。

その中から魔法使いが選んだのは、三つの宝石がひと連なりになった首飾りである。

「これを……」

「いらん」

「どうした、魔力を取り戻したいのだろう？」

三秒で受け取りを拒否したミュシャも、そう言われてぐっと押し黙った。

見るからに呪われていそうな禍々しい気配のするアイテムだったが、呪いの力を打ち消すのは、やはり呪いの力しかないのかもしれない。

「魔石を投げるゲームを知っているか？ わしが若い頃は、悪魔の石のトレーディングが流行っていてな、金貨五千枚と石一個が交換できた、それはもう夢中になって集めたものだ……」

「そんな流行があったのか」

「もう何百匹と悪魔を石の中に封じ込めてきたが、とうとう残ったのはこの三つだけとなった」

「負けすぎだ、じじい」

「どの石にどんな悪魔が封じられているのかは、わしももう覚えておらん。強い悪魔かもしれんし、弱い悪魔かもしれん。もう耄碌して、ろくにゲームもできんからな、お前が使ってくれ」

老人が震える手で差し出す首飾りを、ミュシャはじっと見下ろした。

——悪魔の石。

凶悪な魔力を持つ精霊の一種、悪魔が封じられた石だ。用途はさまざまだが、石から悪魔を開放して、その見返りに望みをかなえて貰うのが一般的な使用方法だ。

その結果に何が起こるかはわからない、すべては悪魔との交渉次第だ。

あまりにも危険なため、リノフでは所持が禁止されていた。なるほど……ここは安全な隠し場所というわけか。

「お前が使ったらどうだ？ もう一度若返るかもしれんぞ」

「いいや……頼む、お前が使ってくれ」

押し返された悪魔の石を、老人はもう一度ミュシャに差し出した。

「世界の運命はすでに間違った方向に動き始めている……全てを正しい道に導くためには、ミュシャ、お前の力が必要だ……預言書にある勇者は、決して一人の事を指すのではない、三人の賢者がそれぞれ別の勇者を連れてくると読み取れる。ミュシャ、お前もまた、赤い星の輝く方向からやってきた勇者のひとりだ。わしはそう信じている」

老人はミュシャの手をとり、その首飾りを強引に握らせた。

もはや押し返す気力も無かった。彼はこの老人を不思議そうに見つめるばかりだった。

そのとき、玄関の扉が叩かれる音がした。

乱暴な叩き方は、おそらく城の兵士だろう。老人は人さし指を立てて、しーと息を漏らした。

「ヘゲニ公爵の使いかなにかじやろう、今は顔をあわせたくないじゃ」

「ここにいろ、薬の受け取りに来たんだろっ」

「あっ、首飾り……」

ミュシャは老人と首飾りをそこに残して、部屋を去っていった。

ドアを開けると、いつかこの屋敷に来たことのある髭の兵士が立っていた。

「薬の納品ならまだ先のはずだぞ」

兵士は嫌なものを見るような目つきをしていた。

いやに苛立った口調で、ミュシャが耳を疑うような事を告げた。

「それでもいい、ありったけの薬をもらっていく。ミュシャ、お前を反逆罪の容疑で城に連行する。言うべき事は以上だ、馬車に乗れ」

エーサ（立夏）十五日の事件

馬車に揺られながら、ミュシャは自分が城に連行される心当たりをいくつかあたってみた。

まず考えられるのは、とうとう彼の正体が魔族である事がばれたという可能性だ。

いまさらな気もするが、これが一番妥当な線だと思う。

ただ、公爵に服従する義理もないのに反逆罪の容疑がかけられている辺りが腑に落ちないが。

つぎに考えられるのは、エーサと会ってしまった事がばれたという可能性だ。

エーサはミュシャと魔王討伐軍の仲介役をしてくれていたので、かなりの確率でヘグニ公は彼がこの禁を破ったことを知っているだろう。

だが、それで城に連行するほどの罪を問われるかどうかを考えるのと、やはり腑に落ちない。

ミュシャに思い当たるのは、おおそそのくらいだった。

……いずれにせよ、じたばたしてもどうにもならない事態だった。ミュシャは普段通り大きく構えていることにした。

遠目にはいつも通りだった公爵の城は、近づいてみるとやけに静かだった。

衛兵や下仕えの者の姿がどこにも見えない。

兵士達はちらほら見かけたが、いずれも隊列を組んで物々しい雰囲気で歩き回っている。

いつもどおり裏の門からこつそり中に通されたミュシャは、番人に不審そうな目でじろじろ見られながら、二階の廊下へと通された。廊下、である。部屋ではない。ヘグニ公爵も椅子にも座らずうろと歩き回り、何かに思いを巡らせているようだった。

灯鬼のようなしわだらけの顔をミュシャに向けると、ぱつと灯がともったように明るくなった。

「おおつ！ おお、よくぞ来てくれた！ でかしたぞ、ミュシャくん！」

でかした？

いったいどんな難癖をつけられるのかと思っていたミュシャは、公爵の予想外の対応に驚いた。

「公爵、なんの遊びだ……」

反逆罪の容疑がかかっているんじゃないのか？

「うむ、うむ、まあ詳しい話は置いて、だ」

ヘグニ公爵は両手をすりあわせ、言葉を選んでいた。

「ミュシャ、わしの専属薬師になりたくはないか？」

何を言っているんだ、この灯鬼は。

即答で断ろうとしたミュシャは、思いとどまった。

周囲の側近達が殺気立っており、雰囲気は尋常ではなかったからだ。

受け入れるつもりはないが、さしあたって理由を聞いてからでも遅くはない。

「なにか差し迫った問題でもあるのか？」

「ぱちんつと指を鳴らし、公爵は「よくぞ聞いてくれた」という素振りで頷いた。

「さすがミュシャくんだ。そうそう、いま我が城は未曾有の危機に陥っている。……あまり大きな声では言えんが、どうやら『侵入者』がいるらしいのだ」

ようやくこの物々しい雰囲気の原因が分かり、ミュシャはうなずいた。

「敵の正体はわからんが、入隊したばかりの魔王討伐軍の兵士達が次々と襲われておるそうだ。救援のための回復薬が少しでも多く必要なのだ」

「なるほど」

「最近では戦争を見越して、回復薬の価格が異様に高騰している。我が軍にも専属の薬師が欲しい所だったのだよ、素材から作ると同じ予算で得られる回復薬の量が倍以上異なってくるからな」

さしあたって薬が必要だという理由も分かった。

「で？ 俺は何の容疑でここに連れて来られたんだ？」

「そうそう、ミュシャくん、君は今、わしに対する反逆の罪に問われているのだよ」

少なくとも、つとめて明るい笑顔で言う話題ではない。逆に恐かった。

「私が何かしたか？」

「おぬしはゲールハーツに薬を売っていただろう？」

「魔王討伐軍に売っていたはずだが？」

「ゲールハーツだっ！！」

ヘゲニ公の小さな体からとてつもない気迫が発せられ、周りの大柄な兵士達がいっしゅん宙に浮いた。

「魔王討伐軍の最高指揮官はいつたい誰だ？ 国王陛下は、この私を、その重大な役割に任命されたのだ！ 直々にな。だが、その補佐役として任命されただけのゲールハーツが陣頭指揮を執り、あまつさえ軍を私物化しようとしておる！ わしの命令を無視し、勝手な行動を起こし回っているのだ！ けしからん、実に非常識きわまらない奴だ！」

怒りでふるふる震える指をミュシャに向けて、公爵はさらに訴えた。

「ここまで言えばわかるかね、ミュシャくん、君が善意で送ってくれた薬は、魔王討伐軍の為に使われていたのではない、すべて、ゲールハーツの手に渡っていたのだよ！ ゲールハーツは君の薬を勝手に使っているのだ！ ゆえに君にはわしに対する反逆罪の容疑がかかっていたのだ。本来ならば即刻死罪なのだがな、だが君は騙されていただけにすぎない、君は魔王討伐軍に手を貸していたのである、ゲールハーツに荷担するような真似をしているつもりはなかったのだろうか？ 違うかね？」

「ああ……」

ミュシャは曖昧な返事をした。

詳しい事はよく分からないが、要するに、魔王討伐軍の内部で分

裂が起こっている、というわけだ。

「知らなかったな、で？」

「そうだろうそうだろう！ 知らなかったただけだろう？ 利用されていただけのだろう？ おお可哀想なミュシャくん、そこでだ、わしの専属薬師になりたくはないか？」

どうやらここで話が振り出しに戻るようだ。

だいたい聞きたいことは聞いたミュシャは、うんざりした表情を浮かべた。

無性に煙草が吸いたくなってきた、ポケットに手を突っ込んだ。

「これからはわしの魔王討伐軍の為に薬を作り続けるのだ。そうすれば君の今までの罪は帳消しにしてやろう。わしが直々に大臣の地位も与えてやるにやぶさかではないぞ！ ははは、どうだね？ なかなか悪い話では……」

「悪いが、他を当たれ」

そう言って煙草の煙を吹いたミュシャを、公爵はぽかんと見上げていた。

「前にも言っただけだ。自分の作った薬を誰に売ろうが、私の勝手だろう？」

どうやらまずい返答の仕方だったらしい、兵士達がミュシャを取り囲むように身構えた。

ミュシャはいつも通りの超然とした態度で、葉巻を吹かしながら彼らを眺めまわした。

弓兵二人に、重装兵が三人。前勇者の側近ともなれば、いずれも強者に違いない。

とても今の魔力だけで倒せる相手ではなかったが、彼は不思議と恐怖を感じなかった。

ヘグニ公爵は干しぶどうのように顔を真っ赤にして唸った。

「か……考え直す、チャンス을くれてやってもいいのだぞ？ ミュシャくん……君はまだ若いのだ、こんな場所で人生を終わらせたくは……」

「こ、公爵殿下……」

そのとき、大臣らしき人物がやってきて、公爵の話を遮った。

ボードーシャツの上にベストを身にまとっている。

私服を着ているので身分が一瞬わからなかったが、確かに大臣だ。おそらく侵入者騒ぎで道が封鎖されていて、制服を取りに行けないのだろう。

彼は武器を構えている兵士達に怯えながら、ヘグニ公爵の小さな耳に耳打ちをした。

「……エーサさまがお部屋におられません」

どうやらまた勇者である。

とたんに公爵は顔をぐるぐると変えた。

「ぐっ……じゃまが入ったようだな」

公爵はもう一度ミュシャに短い指を突きつけると、去り際に吐き捨てた。

「いいかね、これは君のために言っておく。これからは、誰に薬を売るべきかを、よく考えることだ。ゲールハーツに売っても、君の

ためにはならんぞ」

ぱたぱたと廊下を立ち去っていく公爵を、重装兵ががつしゃんがつしゃんと鎧を鳴らして追いかけていった。

髭の兵士もいなくなり、ミュシャはひとりその場に取り残されてしまった。

……ゲールハーツ、お前はいつたい何をやってるんだ？

ともかく、ミュシャまで焦る必要はなさそうだった。

花瓶の中に灰を落として、彼はしばらく煙草を吸っていた。

「ふつざけんな！ 魔王討伐軍を私物化していたのは、公爵の方じゃねえか！」

天空城にサージの怒りの声が響き渡った。

ミュンは目を丸くして不思議そうな顔をしていた。

「どういうこと？」

「ミュン、魔王討伐軍ってのは、魔王と戦う軍の事だろ？ じゃあすぐ近くに暴徒に襲われている町を発見したら、優秀な指揮官はどうするべきだと思う？」

「黙って見てた方が良いの？」

「それは俺の嫌いなパターンだ。……だが、公爵が取ったのはもつと汚い、最悪のパターンだった！ 公爵は貴族から金を受け取って、見返りに魔王討伐軍に貴族街だけを守らせた！ すぐ隣に暴徒に襲われている市民街があったんだぞ！ なのに俺たち参加兵士は貴族街から一步も動くことが許されなかった、参加兵達はなんか間違っ

てるんじゃないかってみんな苛立つてたさ、そこでゲールハーツが兵士達を先導して、陣頭指揮を執って戦ったんだ、そのお陰で、ようやく暴徒を町から追い払うことが出来たんだぞ！」

「それってどっちも私物化には変わりないんじゃないの？」

「ミュン！ お前はいま、全俺を敵にまわしたあっ！」

サージは勢いよく立ち上がった。

「この心意気が分からないなんて、なんて無粋な奴だ！ 俺だけじゃない、ここにいるのは全員、ゲールハーツについてきた奴らだぞ！ なあ、みんな！ このエルフに人間として血の通った意見を言ってやれ！」

「サージ、ごめん、僕は、その時はまだヘグニ公爵の側についてただけど……」

オルフェウスはおそろおそろ言った。

「だって魔王討伐軍は結成して間もなかったんだよ？ 戦いに不慣れな一般人もたくさん混じってたんだ……だから、関係のない戦いであまり消耗させないっていうのは指揮官として賢明な判断だったと思うんだけど……」

「うーん、つか、その戦い自体、俺はあんまり気に食わないんだよな……」

アツカはぎこちない返答をした。

「なんでって、その暴徒ってのは俺たち人狼ライカンの親戚だったからよ。なんか戦争の影響でアンドラハルの魔物が大量に流出してきて、すみかを追われてきたって言うてたぜ。追い払うだけ追い払って、で、その後の事はどうするんだって言うたら、ゲールハーツはどうす

「することもできないって言うてたぜ……」

「わた……しは……」

サーラもぎこちない返答をした。

「なにも……殺さなくても、話し合い、場を設けるとか……もっと、他に方法はあるんじゃないか、って……思います……」

サージは悔しそうに歯がみした。

「ちくしょう！　なんてこった、ここに来て信じがたい事実が発覚した！　お前らみんな味方だと思ってたのに！」

「サージ、あなた意図的に私の方を見ないのはどうして？」

「どうせお前は俺に否定的な意見しか言わないんだろうが、イーラ！」

「失礼ね、私はゲールハーツの行動は正しかったと思っているわ」

イーラは珍しくサージに同意した。

「結成したばかりだからこそ、世間や参加している兵に魔王討伐軍の立場を明確に示す必要があったんじゃないの？　勇者の軍が実はほとんど戦わなかったなんて知れたら、軍の信頼が失われてしまうわ。どのみち現場で強烈なリーダーシップをとる人間は必要だし、ただそれが最高責任者とそりが合わなかったというだけの話じゃないのかしら？」

「それは結果論ですよ。確かに追い払うことには成功して士気は高まりましたけどね、他にも不安要素があって……」

「ちゅうか、オレはあの戦い自体がそもそも気にくわないんだって！　建物壊して食糧うばってただけだろ！？」

すかさずアツカやオルフェウスが反論した。
ミュンは耳をぴこぴこ振った。

「なるほど、やはり人によって色々な見方があるもののね。貴方たちのことがすこし分かってきたような気がします」

「ちくしょう、こんな時に俺の味方がお前だけだなんて！」

「あら、私はいつも貴方の味方だったつもりだけど？」

「すり寄ってくんな！ ていうかお前はあの戦いの時もいなかったじゃないか！ 一体どこ行ってたんだ！」

「生理よ。いちいち言わさないでよ、変態」

「あの……わた……し……そろそろ……出番……かな……？」

サーラがおずおずと手を上げたが、議論が過熱して誰も聞いていなかったなので、おずおずと手を引っ込めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6103z/>

アンドラハルの魔王

2012年1月12日15時48分発行